

42406

教科書文庫

4
810
42-1938
2000 ♡ 73197

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

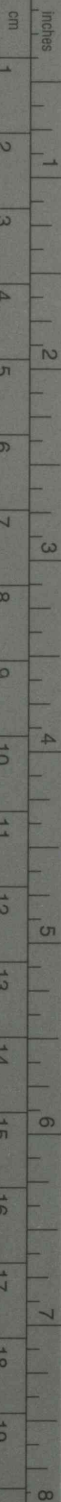


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
昭13

昭代女子國文

四年用

卷二





昭憲皇太后御作唱歌

金剛石

金剛石も	磨かずば
珠のひかりは	そはざらむ
人も學びて	のちにこそ
まことの徳は	あらはるれ
時計の針の	絶えまなく
めぐるが如く	時の間の
日影惜しみて	勵みなば
いかなる業か	成らざらむ

水は器

水はうつはに	したがひて
そのさまざまに	なりぬなり
人もまじはる	友により
善きに悪しきに	うつるなり
己にまさる	よき友を
選びもとめて	もろとも
心の駒に	鞭うちて
まなびの道に	進めかし

(昭憲皇太后御集)



# 昭代女子國文 卷二

## 目次

昭憲皇太后御作唱歌(朗誦歌).....	卷頭
一 皇后陛下.....	大島義脩.....一
二 祖國の柱(詩).....	大木惇夫.....九
三 スポーツ雑話.....	辰野保.....二
四 熊谷次郎.....	柳澤洪園.....三〇
五 圖書館のこと.....	吉屋信子.....三三
六 猫の作戦計畫.....	夏目漱石.....三九

七	明治天皇御製頌歌(詩)	八代六郎	五
八	水に映つた星	野尻抱影	四〇
九	燈臺守	藤井乙男	四五
一〇	雙柿舎の翁	吉田絃二郎	五〇
一一	月夜の天橋	徳富健次郎	五七
一二	王瀬長者		六三
一三	白菊(詩)	千家元麿	六九
一四	雪中物語	芳賀矢一	七一
一五	英國皇帝戴冠式記事	久米正雄	七六
一六	厨子王	森鷗外	八六
一七	物に添へて(手紙)		一〇三

一八	安宅	坪内逍遙	一〇五
一九	父上のおん手の詩(詩)	山村暮鳥	一二三
二〇	孝行	橋南谿	一二四
二一	多摩御陵參拜の記	九條武子	一三三
二二	身の恥になること知らぬ女房	柴田鳩翁	一三三
二三	知行並進	貝原益軒	一三六
二四	青鬼灯(和歌)		一三六
二五	母心を讃ふ	川久保かね代	一四四
二六	懐かしの故郷	村井弦齋	一五三
二七	草の言葉	島崎藤村	一六四

目次終

昭代女子國文 卷二

一 皇后陛下

大島義脩

日本の女子教育は漸次向上しつゝある。その女子教育界に在つても、皇后陛下の受けさせられた御教育の程度は非常に高く、陛下ほどの高い教育を受けさせられた御方は、皇族中でも殆ど稀で、また極めて特殊な少数の人々を除いては、日本の一般の女性の中にも、そのたぐひがないと言ふことは、誠に有難いことであると拜せられる。

大島義脩

前女子學習院長

宮中顧問官

昭和十年(一九五五)歿  
年六十五

皇后陛下

御名良子(ナガコ)

明治三十六年(一九一三)

御誕生

久邇宮邦彦王第一女

王

大正十三年御入内

皇后陛下の東宮妃册立に關する最初の御沙汰のあつたのは、大正七年一月十四日のことで、陛下芳紀正に十六歳の

御時である。それか

ら間もなく、陛下には

女子學習院中等科第

三學年を御退學にな

り、麴町一番町の久邇

宮邸内に新しく設け



皇后陛下の幼時

られた御學問所に於て、普通の女學校程度の教育の上に、更に三箇年の高等教育を受けさせられ、なほその外に數多くの特別講義を御聽取りあそばされた。

女子學習院

東京市赤坂區青山三丁目

久邇宮邸

今は東京市澁谷區赤十字病院の隣

聽聽

右のやうな次第で、學問上の御素養としては、餘程根柢のある、しつかりしたものが御ありであるから、今後その御基礎の上に伸びて行かせられる陛下の御將來を想像し申し上げる時、いかにも頼もしく拜察されるのである。

陛下には天資御聰明にわたらせられ、御頭腦は眞に名刀の如く、はつきり澄みきつていらせられる。このことは獨り御學業の上ばかりではなく、御平常の御生活の上にも現はれてゐて、何事によらず、よく要點を捉へさせられると同時に、更に細かい隅々にまでも御注意の届かせられることは、全く感歎し奉る外はないのである。畢竟陛下には、細かい所までも御注意が届かせられると

腦腦

歎歎

35

寫一写

333

御筆蹟

をりにふれて  
あたゝかにふせるも  
くるしふすまなき、  
かりやのひとをおも  
ひいづれば 良子

満一満

いふ點では、女性特有な長所をもたせられると同時に、かの要點急所を逸すると言ふやうなことは、決して御あり遊ばされないと言ふことになるのである。

御寫眞等を拜しても窺はれる様に、陛下は御姿が端麗に  
皇后陛下御筆蹟

をりにふれて  
あたゝかにふせるも  
くるしふすまなき、  
かりやのひとをおも  
ひいづれば 良子

いらせられる上に、御心操こころばへが優に氣高くいらせられ、誠に冒し難い品位を具へさせられてお出でになるが、さう言ふ氣高い中に優しさや懐かしさが充ち満ちて、始終にごくとしてお出でになり、つんとあそばしたり、むつとなされたり



下 陛 后 皇



するやうな御様子をお見せなされたことなどは、唯の一度もおおりにならないのである。

侍女や御學友に對しても、非常にお優しく、第一同情のお深いことは驚くばかりで、どんなことがあつても、決して他人の困るやうなことは遊ばされない。御學友に何かちよつと都合があり、早くお暇を戴きたいと言ふやうなことでもあると、陛下の方から先きに其の事をお言ひ出しになり、決してお忘れになつたりするやうなことはない。そして講義をお聴きになつていらせられる時でも、御學友の鉛筆でも折れたりするのを御覽になられると、すぐ御自分のものを御與へになるなど、何事にもよくお氣がおつきになる。

體一休

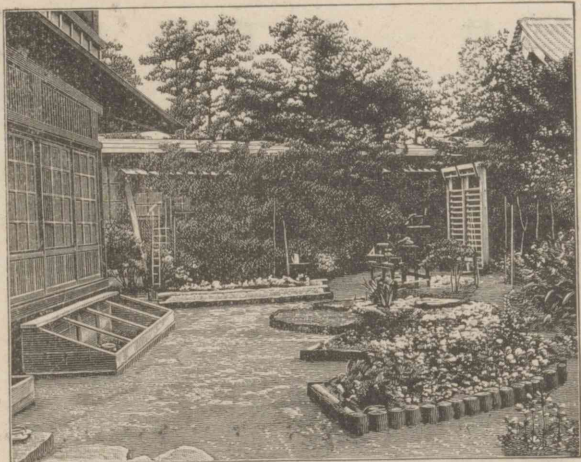
陛下の御健康は勝れてお宜しく、御體格も大層しつかりしてお出でなされる。御運動も御熱心であれば、お力も非常に強い。

學習院御在學中は、強ひて何か不足を申し上げると、御丈が低くおありなされたと言ふことであつたさうであるが、今は並の女性よりも遙かにお高くなつていらせられるから、全く批點のうち所がないと申し上げなければならぬ。御運動にはなかく御熱心で、テニスも遊ばされ、ゴルフも遊ばされる。その外、御趣味が至つて廣く、園藝のお嗜みもあり、繪も書もお見事であれば、和歌にも御堪能で、ピアノも頗る妙境に入つていらせられる。殊に御聲の美は

ゴルフ  
一種の打球戲

聲一

しいことは驚く許りで、女性的な澄み渡つた美しい陛下の



御書齋の花畑

御聲と、あの男性的な大きな天皇陛下の御聲とは、誠に御立派な對照であると拜せられる。陛下には、侍女や御學友に對して、御同情がお厚くお出で、そばすばかりではなく、お小さいお子様方に對してもまことに御親切で御親戚のお子様でもお出でになられると、何くれと、それはよくお世話を遊ばされる。そしてそのお恵み深いお世話、小鳥の上に

徳禽獸に及ぶ  
湯の徳、禽獸に及ぶ  
(呂氏春秋)

點  
点

までも及ぼさせられ、鳩のお世話などは、涙のこぼれる程御親切に遊ばされる。鳩の世話は、なか／＼辛抱強い人でなければ出来ず、普通の人でも、容易ならぬ骨折とされてゐるものである。それにも拘らず、陛下は誠に御辛抱強く、長い間おかはいがりになられたものであるから、鳩の方でも、陛下にはよくお懐き申すやうになつたとのことである。「徳禽獸に及ぶ」と申し上ぐべきであらう。

久邇宮家は御一家の御睦みが深く、一家御團欒の御様子は、拜し奉るだに畏れ多い程であつて、御和樂の空氣が御家庭の隅々までも漂ひ、しかもその中には嚴格なお躰がおありになると言ふことである。つまり陛下の天稟の御美點

麗  
潔

と、この家庭の御薫陶と、そして御學問並びに實地御見學の御修養との三拍子が十分に揃つて、今日のあの麗はしい玉の様な陛下とおなりなされたので、今後に於ては、益、輝かしいお光をお放ちなされることであらうと拜せられる。

かやうに御修學時代からすぐれて御體も宜しければ、御徳も高く、その上御見識も秀で、御知識にも富んでいらせられたのであるから、今この陛下を皇后宮として仰ぎ奉ることとは、まことに有難ききはみと申さなければならぬのである。

大木惇夫

詩人

廣島市の人

明治廿八年(五五)生

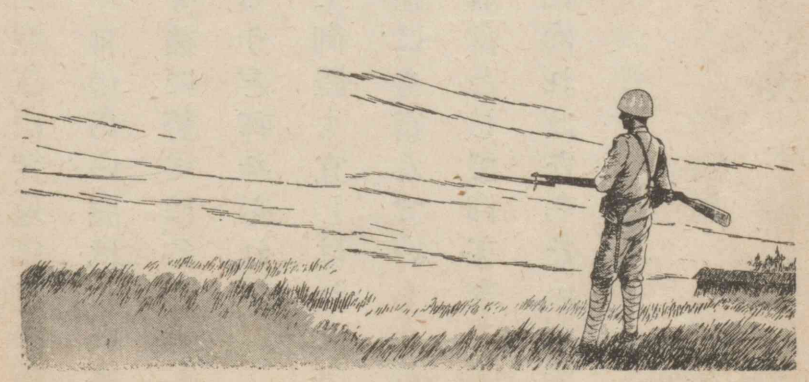
二 祖國の柱

大木 惇 夫

赤き夕日  
思へば悲し  
「ここはお國を何百  
里……赤い夕日に照  
されて」「思へば悲し  
きのふまで」といふ  
軍歌の語。

わが呼ぶ聲……  
塚も動けわが泣く聲  
は秋の風  
(芭蕉)

高粱枯れて	鳥啼く
赤き夕日の	國境
思へば悲し	つはものは
曠野の露と	消え果てて、
今は眠るか、	この丘に。
祖國のために	捧げたる
いとも尊き	人柱
苔むすかばね	靈あらば
わが呼ぶ聲に	弔して
塚も動けよ	秋風に。



祖國

辰野保  
辯護士  
體育批評家  
東京の人  
明治二十四年(五五)  
先生  
先年  
大正十五年(五六)

手向の花は	薰れども
赤き夕日の	血に染みて、
風愁愁の	音を忍ぶ。
幽魂永く	とどまりて
祖國を護れ、	亡き友よ。」

(詩話集 國境の町)



三 スポーツ雑話

辰野保

先年、巴里の世界オリンピック大會に参加した英國の選手が、愈、倫敦を出發するに際しまして、倫敦市民の代表者は

ベストアマチュア  
アスリート  
最良の非職業的競技  
者

スポーツマンライ  
ク  
スポーツマンらしく

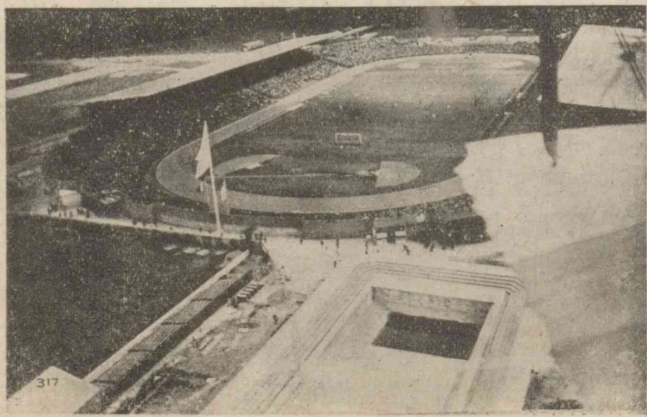
選手一同を集めて、我々は、諸君が今回巴里に集まる各國の  
競技者の中で、世界中のベストアマチュアアスリートであ  
る事をのみ望む。我々は、勝敗の歸趨はもとより問題とし  
て居らない。唯、雄々しくスポーツマンライクに戦つて呉  
れたと聞く時に、我々英國國民は、其の温かい手に諸君を迎へ  
るであらう。と言ふやうな送別の辭を一同に呈して居りま  
す。アマチュアアスリートといふ事アマチュアスポーツ  
といふ事、即ち非職業的選手といふ事が、如何に彼等の強い  
願ひであるかといふ一事は、斯くの如く事毎に表はれてゐ  
るのであります。」

二

レスリング  
我が國の相撲にあた  
る  
チーム  
組  
團體

内藤選手  
名は克俊  
鹿兒島縣の人

日本のレスリングの選手として巴里の大會に出場した  
内藤克俊君は、アメリカの學生テ  
ームの優勝者でありました。  
彼は、アメリカの選手と共に佛蘭  
西に渡つて來た。其の船には、無  
論アメリカレスリング倶樂部の  
優勝者である彼のリード選手も  
同船して居ました。船中の朝な  
夕な二人は非常な親交を續けて  
ゐた。船中でも内藤選手の左の  
人差指の怪我について、リード君は常に人一倍心配もし介



場會大里巴

抱もして呉れました。やがて巴里に着くと、此の二人は豫定の如く連勝して、遂にレスリングの準決勝戦に於て相見<sup>まみ</sup>える事になつたのであります。試合は最初から火花を散



所宿合村ツピンリオ

らして開始されました。正規の十分間といふ時間の後二分と言ふ時に、お互に祕術を盡くした末、内藤君は惜しくも遂に敗れたのであります。

私のお話したいのは、丁度其の夜の出来事です。リード選手は、オリンピック村の日本選手合宿所を一人訪ねて、内

秘 秘

オリンピック村  
ヴィラアジュエーオリ  
インビーク（佛蘭西  
語）  
オリンピック大會に  
出場する選手の宿舎  
を特に或場所へまと  
めて作りし所  
オリンピック  
オリンピック競技とは  
往古ギリシャにて四  
年毎にオリンピック大  
祭を行ひ、五日間大  
競技を行ひし事を指  
す。これ今のオリン  
ピック大會の起なり

ゲ ー ム

競 技  
ハンディキャップ  
競技などに優者に物  
を負はしめ又後れて  
出發せしめたりして  
競技者の優劣を平均  
せしむること

ラ ン キ ン グ  
等 級

藤君の手を握つて「實に今日は辛かつた。君の左手の手痛  
い負傷を自分はよく知つて居る。今度のゲームの最初か  
ら僕は君と相會ふ日を苦に病んでゐた。君には大きなハ  
ンディキャップがあるのだ。自分は今日辛うじて君に勝  
つ事を得たものの、心の中では親友の爲に絶えず泣いてゐ  
た。此の上は僕は最後まで立派に戦つて選手權をきつと  
自分の手に得よう。そして僕は自己の第一人者となる事  
によつて、一方米國のレスリングの名譽を輝かさせると共  
に、又他方君のランキングを上げる事に努力する」と聲涙共  
に下つて誓つたといふ。即ちリード君が一等になれば、そ  
れに負けた内藤君の順位は上がるから彼はさう泣いて誓

日・華・比  
日本・中華民國・比律  
賓

マラソンレース  
長距離競走  
現在のオリンピック  
では廿六哩四分の一  
即ち約四三・四五軒  
を走破する  
スタート  
出發  
スタートを切るとは  
出發すること

つたのであります。アメリカにもこんな優しい、いゝ選手  
がゐます。

三

大正十二年五月、日・華・比三國の極東選手權競技大會が大  
阪で開かれました。

日本軍の勢もの凄く、既に優勝は確實でありましたが、最  
後の日に愈、呼物の廿六哩マラソンレースが行はれました。  
此の競走に参加した一人に、岡山縣の長谷川照治といふ青  
年があつたのです。其の日は雨上りの實に蒸し暑い日で、  
正午競技場にスタートを切つてから、長谷川君は、地方青年  
に見る一本氣の眞面目さで、常に先頭をきつて廿六哩の長

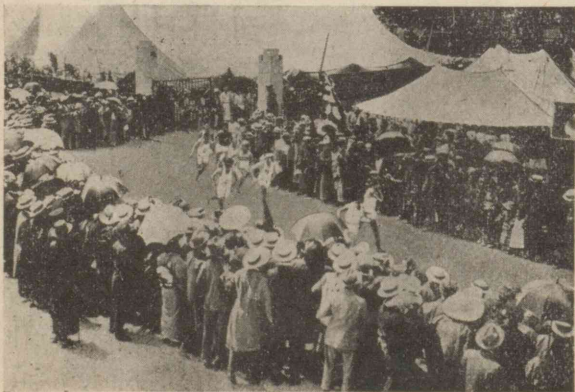
コース  
道程

スタデイアム  
競技場

観  
観

いコースを見事に走破しまして萬雷の如き歡呼の中に今  
やスタデイアムに歸つて來ました。

然し不幸にして、其の時は既に  
此の勇者は殆ど其の精力を消耗  
し盡くして、どうやら視力さへも  
失つたかの様でありました。其  
の中に、彼は競技場の半ばごろま  
で來ますと、俄かに氣を失つて、其  
の場にうち倒れてしまひました。  
「折角こゝまで先頭を切つて來た  
ものを」と、場を埋めた何萬の觀衆は、あと三百米許りに迫つ



廿六哩マラソンの出發

た決勝點まで、何とかして彼を再び起たせて走らせようとして狂氣の如くになつて、或は其の名を呼び、或は柵外より聲援をしましても、國際競技規則によつて、競技者の身體に觸れる事を絶対に禁じられてゐます以上、倒れ臥した長谷川君を再び起して走らせる方法は、到底見出すすべもなかつたのであります。

丁度其の時です。當時の役員の一人、野口源三郎君は、走つて一本の日の丸の小旗をとつて、これを柵の中から倒れた長谷川君の目の前に持つて行つて、長谷川君、日本の爲にやつてくれ」と言ひながら一振り振つたのでした。すると今まで全く生氣を失つてゐた長谷川選手は、すつくと起き

野口源三郎  
東京高等師範學校教  
授

上つた。そして野口君の日の丸の旗で指す方に、彼はとぼとぼと走り出したぢやありませんか。

見物は、此の悲壯な光景を見てほんとに泣きました。彼は又倒れた。再び日の丸の旗は振られた。彼は又起き上つた。そして三度倒れて、遂に彼は決勝點に入つたのであります。何萬の觀衆は、面を上げてよく此の光景を正視する者はありませんでした。我々は、今日も尙ほ其の當時を偲ぶと、眼の底が熱くなる様に感じます。我々は、其の日、其處に、眞の日本を見たのです。日本にも實にいゝ選手があるぢやありませんか。

(スポーツ隨筆)

決一決



柳澤淇園

江戸時代の儒者

名は里恭

寶曆八年(四)〇歿

年五十三

熊谷次郎

直實といふ

平知盛に仕へ、後頼

朝に降り、更に京都

黒谷の源空の弟子と

なりて蓮生坊と稱す

承元二年(八六)寂

年六十八

近江

滋賀縣の國名

美濃

岐阜縣の國名

山中

不破の關附近ならん

#### 四 熊谷次郎

柳澤淇園

熊谷次郎、入道して關東へ下向せる折から、たゞ一人近江路より美濃へ越ゆる山中にて、盜賊二人前後を支へて「路銀衣服をわたすべし」とて、兩人刀をぬきつれ通りにければ、入道笑ひながら、「いと安きことなり。その方等も命をかけて賊をわざとするは、身過ぎの爲と思はれたり。路銀衣服とも遣はすべし。さあれど、こゝに尋ぬることあり。聞きたる上にてともかくもすべし」といふに、賊もその詞のはげしきに猶豫して、「いかなることをか尋ぬるぞ。疾く言へ。聞かん」といふまゝに、入道の申さるゝは、「汝等は唯欲のみに

賊をなすか。又身を立つる所なくして、過ぎはひの成り難くて賊とはなりしや。この二つの返答を聞かまほし。その上にて取らすとも取らせぬとも、わが心に任せんと。

熊 賊等は互に顔見合はせつゝ、「飲

谷 食だに自由ならば、いかでか人を

次 害し、人の物を奪ふべきや。任せ

即 ぬよりして、命に易へてかゝる業

をもするなり」と言ふに、「さあらば、

今より我が徒弟となりて、世をの

どかにくらし、生涯無事に過ぐるの志はなきや。もし二人



四 熊谷次郎

ともその志あらば、今より直に伴なひて、法を傳へて一庵の留守居ともなして得さすべし。よくよく思案して従ふべし。とて、持ちたる路資を取出し、二人に分ち與ふれば、賊又顔と顔とを見合はせ、土に掌をつきて、さもなし給はらば、けふよりして頓に志を改め、御弟子となりて、これまでの罪障を亡ぼし侍りたし。とて、こがねには手をだに觸れずして、頭をさげてみたり。

武藏野  
關東平野の一部  
埼玉縣川越市以南、  
東京府府中までの間  
に擴がれる原野

入道大いに喜び、懷より剃刀取出で、二人の盜賊が髻をなぎ捨て、法師となして、武藏野なる草庵に伴なひつれ、一人を善心坊と呼び、一人を法心坊と名づけ、武藏野念佛の弘通をなして、めでたき往生を遂げたりとぞ。入道の徒弟十餘人

の中、この二人ぞその始めなりしとかや。黒谷夜話に見えたり。

（雲萍雜誌）

吉屋信子

小説家

新潟市の人

明治二十九年（五五）

生

日比谷の

東京市麹町區日比谷公園にある圖書館を  
さす

五 圖書館のこと

吉屋信子

一番始めは日比谷のへ行きました。小ぢんまりした構へのやうな氣がしました。婦人の室は、狭い一室でした。そして奇麗に片づいて居ます。卓子の上には新刊の婦人雑誌が載せて有りました。お辨當などを使ふ一室が脇につけてあつたし、窓の外には何か桐の木みたいな葉の茂つたのが見えました。室内の壁には額などがかゝつて、割合に私室めいた感じの作りでした。一方の壁には會社の事

カード  
紙票



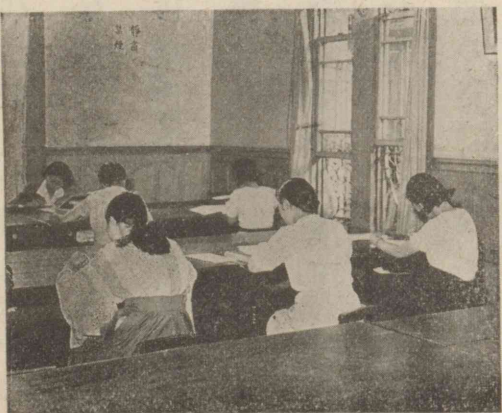
日比谷圖書館のカード室

務室の部屋へでも行つた様に、カードを入れた抽斗がならんでゐて、そつと音のせぬ様それを出してはカードをめぐり、めぐり、自分の読み度い本の名を探しつけるのでした。もし此のカードに無かつた時には、階段下のカードの抽斗を探したりしました。なか／＼自分の讀む本の名の見附からない時や、そして折角見附けて、それを書きつけて、本を取りに行つても、今貸出しになつてゐて手に渡らない時などは、ほんとにがっかりしてしまふ……。

ネル  
フランネルの略地の  
柔かき毛織物

でも、一冊でも二冊でも有つた時は、喜んでいそ／＼室に戻つて、さてどの邊に」と机や窓のほとりを見渡して、なるべく一人ぼつちで居られるやうな場所をとり、本を廣げて見入る心持——忘れる事が出来ません。私はまだ肩揚があつたのです。そして何故かネルを着て通つた事が多い思ひ出です。

初夏と初秋の頃、私は絶えずあの日比谷圖書館へ通ひつめてゐたやうです。回数券のやうなものを買つて行つた覚えがあります。入口の係の人も下足



婦人閲覧室

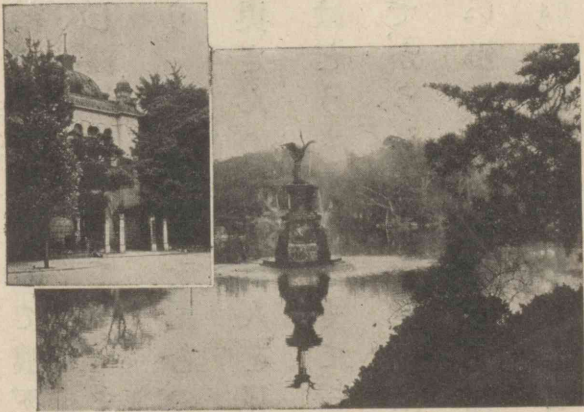
番のお爺さん達も、皆親切な人でした。下足といへば、あそこの上草履ッたら、どれもく、ちぐはぐの藁草履で、ほんとにをかしかつた。

婦人の室は静かであり、氣持でした。來てゐる方達も、皆おとなしいもの優しい感じの方達でした。時々きまつた様に顔を合はせる人達も居ました。その中に、一人随分奇麗な美しい二十二三の人が居ました。もう學校は出てしまつたのか、何時もきちんとした帶の姿で、すつきりとした物腰。靜かに何かの本——それは館内の貸本ではなく、自分の持つて來た包の中から、取出した本を読むのです。本を読む時だけ、海老茶びろうどのサックから、縁無しよこの眼鏡

サック  
眼鏡入

を出してかけるのです。細い金の蔓が、灰白い品のいゝ横顔の顚顚こみかみを掠めて、根下りに無造作に束ねた髪の後毛が少し纏まとつたりして、……まあ、私どんなに好きになつた事でせう。自分の本を読むのも忘れて、ぼうとして、その美しい若奥さんのやうな人を見詰めてゐたりしました。多分、家ではどうも氣忙しくて、折角買った本も落着いて讀めないの、かうして隙を見ては、圖書館へ來て讀んで行くのぢやないかなどと想像して見ました。その讀んでゐる本が何といふ本か知りたくつても、覗いて見るのが恥しくて……。

何時か、其の人が、偶然私の隣の空いた椅子へ腰かけて卓子へ向はれた時など、胸がわくわくして、私は自分の前の本の



日比谷公園と圖書館

活字が飛んで頭に入らないで過してしまひました。その美しい方は、せいと、三十分位さうして讀まれると、又さうと物靜かに扉の外へ出て歸つてしまふのでした。その人の見えない日は、寂しい氣持がしました。「今日はもうあの方は來ないのだ。かう諦めて、しを」と私は夕方館を出て行きました。歸りに公園の中へ道草をして、夕闇のせまる植込の蔭をさまよひつゝ、もし自分も書けるのなら、上手な小説をかいて、あんな奇麗

ハウプトマン

(一八六二)

獨逸の戯曲家

小説家

沈鐘

劇曲の名

ノート

筆記

夏目漱石

小説家

英文學者

名は金之助

東京の人

大正五年(一五七)歿

年五十

の發端

「吾輩は猫である。名はまだない。どこで生れたか鐘と見當がつかない。」

な人に讀まれてほしい……と考へたりして、一人で赤くなつてしまひました。お濠端の黄昏の灯ともし頃、電車路の混雜など忘れ得ぬ思ひ出です。あそこで讀んだ本では、何故か、ハウプトマンの「沈鐘」がひどく記憶に残つてゐます。其の頃は、讀書と同時にノートを取つたりしたので、古いノートの幾冊かが、いまだに残つてゐます。(處女讀本)

### 六 猫の作戦計畫

夏目漱石

吾が輩は、今夜こそ鼠を捕つてやらう。と思つて、種々作戦計畫をめぐらして居たが、夜はまだ浅い。鼠はなか／＼出さうもない。大戦の前だから、一休養を要する。

勝手には引窓がない。座敷なら欄間といふやうなところが、幅一尺ほど切抜かれて、夏冬吹通しに引窓の代理を勤めて居る。さつと吹込む風に驚いて目をさますと、何時の間にか、月さへさして、へつゝひの影は斜に揚板の上にかかる。寝過しはせぬかと、二三度耳を振つて家内の様子を窺ふと、しんとして昨夜のごとく、柱時計の音ばかり聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。」



夏目漱石筆

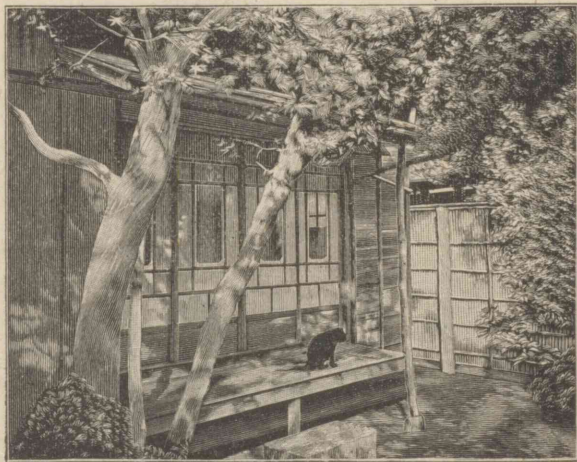
三寸  
一寸は約三厘

戸棚の中で「ごとく」と音がしだす。小皿の縁を足で抑へて中をあらして居るらしい。「こゝから出るわい」と、穴の横にすくんで待つて居る。なか／＼出て来る氣色はない。皿の音はやがて止んだが、今度は井か何かにかゝつたらしい。重い音が時にごとく／＼する。しかも戸を隔ててすぐ向側でやつて居る。吾が輩の鼻づらと、直径にしたら三寸も離れて居らぬ。時々はちよろ／＼と穴の口まで足音が近寄るが、又遠のいて顔を出さぬ。戸一枚向ふに、現在敵が暴行を逞しうしてゐるのに、吾が輩はじつと穴の出口で待つて居らねばならぬ。随分氣の長い話だ。鼠は旅順椀の中で、盛んに舞踏會を催して居るらしい。せめて吾が輩の

入れるだけ、おさんが此の戸を開けて置けばよいのに。

今度はへつゝひの蔭で、吾が輩の鮑貝がことりと鳴つた。

「敵は此の方面へも來たな」と、そ  
うつと忍び足で近寄ると、手桶  
の間から尻尾がちらと見えた  
石ぎり、流しの下へ隠れてしまつ  
のた。暫くすると、風呂場でうが  
家ひ茶碗が金盥にかちりと當つ  
た。今度は後方だと振向く途  
端に、五寸近くある大きな奴が、  
ひらりと齒磨の袋を落して縁の下へ駈込んだ。逃すもの



續一統

臺一合

かと續いて飛降りたが、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思つたよりむづかしいものである。吾が輩は先天的に鼠を捕る能力がないのか知らぬ。

吾が輩が風呂場へまはると、敵は戸棚から駈けだし、戸棚を警戒すると、流しから飛びあがり、臺所の真中に頑張つて居ると、三方面とも少々づつ騒ぎ立てる。小癩と言はうか、卑怯と言はうか、到底彼等は君子の敵ではない。吾が輩は十五六回は、あちらこちらと氣をつからして、奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。残念ではあるが、かゝる小人を敵にしては、如何なる東郷大將も施すべき策がない。始めは勇氣もあり敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美感さ

東郷大將

侯爵

元帥

海軍大將

大勳位

名は平八郎

薩摩の人

昭和九年(一九三四)薨

年八十八

へあつたが、遂には面倒なのと、馬鹿げて居ると、眠いのと、  
疲れたのとて、臺所の眞中へ坐つたなり、動かない事にな  
つた。併し動かないでも、八方睨みをやつて居れば、敵は小  
人だから大した事は出来ないのである。」

目ざす敵と思つたものが、存外詰らない奴であると、戦争  
が名譽だと云ふ感じが消えて、憎いと言ふ念だけ残る。憎  
いと言ふ念を通り越すと、張合が抜けてぼうつとする。ぼ  
うつとした後は、「勝手にせよ、どうせ氣の利いたことは出来  
ないのだから」と、輕蔑の極眠くなる。吾が輩は以上の徑路  
を辿つて遂に眠くなつた。吾が輩は眠つた。休養は敵前  
に在つても必要である。

漱石全集

輕一輕

徑一徑

八代六郎

海軍大將

海軍大臣

樞密顧問官

男爵

愛知縣の人

昭和五年(一九三〇)薨

年七十

わが國

御題「神祇」

宸筆

花ぐはし櫻もあれど  
此やどの世々のこゝろ  
を我はとひけり  
明治八年四月四日  
明治天皇小梅の水  
戸徳川邸行幸の折  
の御製

七 明治天皇御製頌歌

八代六郎

御製「わが國は神のすゑなり、神祭る

昔の手ぶり忘るなよゆめ。」

(明治天皇御集)

いましめて範示します

大君の尊き御業よ。

明治天皇宸筆

花ぐはし櫻もあれど  
此やどの世々のこゝろ  
を我はとひけり

神の代の聖きならひを

藏順園川徳爵公



人もわれも  
御題「國」

わすれめや、われら國民。  
= 御製「人もわれも道を守りてかはらずば  
この敷島の國はうごかじ。」

〔明治天皇御集〕

奥山の  
奥山のおどろが下も  
踏みわけて、道ある  
世ぞと人に知らせん  
(増鏡)

奥山のおどろが下も  
大君のみさとししるく  
ゆく道はただのひとすぢ、  
ふみ行かん、われら國民。

=

御製「たらちねの親につかへてまめなるが  
人のまことの始めなりけり。」

〔明治天皇御集〕

たらちねの  
御題「孝」

榮—榮

おのが身は  
御題「義」

そのまこと捧げてもちて、  
なべてわが親にています  
大君につかへまつらん。  
光榮の子ら、われら國民。

四

御製「おのが身はかへりみずして人のため  
盡くすぞひとの務なりける。」

〔明治天皇御集〕

はなばなし榮ある務、  
われならず人のためのみ  
家のため國のためのみ  
盡くしなん、われら國民。

よもの海  
御題「正述」「心緒」

五

御製「よもの海、みなはらからと、思ふ世に  
など波風のたちさわぐらん」  
むら雲の上も月澄む、  
大君の尊き御心  
外つ國も仰ぎまつれり。  
畏めや、われら國民。

(明治天皇御集)

おほぞらに  
御題「峯」

六

御製「おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも  
登ればのぼる道はありけり」  
仰ぎ見る高峰ののぞみ、

(明治天皇御集)

讚讚

いにしへの  
御題「書」

明治天皇御製

その道のよし嶮しくも  
いや仰ぎいや讚へつつ  
登りなん、われら國民。

(國民歌謡曲集)

器には  
御題「水」

庭のおもの  
御題「土筆」

いにしへの文の林をわけてこそ  
あらたなる世の道も知らるれ。  
器にはしたがひながらいはがねも  
とほすは水のちからなりけり。  
庭のおもの芝生がなかにつくつくし  
植ゑたるごとくおひいでにけり。

(明治天皇御集)

野尻抱影

英文學者  
本名正英  
大佛次郎の兄  
横濱市の人  
明治十八年(西曆)生

八水に映つた星

野尻抱影

子供たちが墓を飼つてゐた空池が、墓が次ぎぐに逃げ  
てしまひ、後には梅雨の水がたぶくと溜つた。或晩、ふと  
そこへ行つて見たら、大きな星がぼつんと映つてゐて、すつ  
かり池をまとまつた物にしてゐた。

その星は、頭の上に来てゐた牛飼座の主星で、これからも  
夏の長い夕明りに、西の空に逡巡としてゐる金色の星であ  
る。「沈むに遅き」とホメエロスが歌つたことは、今でも變り  
はないのである。

けれど、私が水底のその星に目を牽かれたのは、さういふ

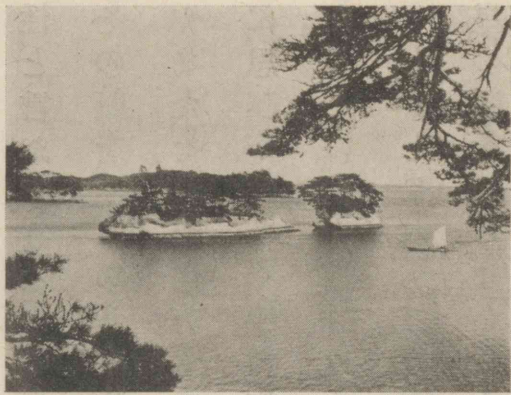
ホメエロス  
ギリシヤ最古の大詩  
人

聯想からではなかつた。これほど大きな星となると、私た  
ちがその色、光、瞬きなどで、永い間に自然と感得してゐる個  
性と言ふやうなものがある。或は、星の顔と言つていゝ。  
その顔を、空にある本物を見る前に、水の中に見つけたこと  
や、また、それが、途方もなく遠くにゐる星だと知つてゐるの  
に、思ひがけなく、手で掬へもしさうな地上の物となつてゐ  
たことに、何か微妙なものを感じた爲だつたらう。

しかし、これもまだ捉はれてゐる感じ方だらう。私は星  
星の顔を知らなかつた昔に復つて、しかも池沼、湖、入江、凡そ  
止水の面になら、どこでも、映つてゐる、珍しくもない星の  
影を、いつも珍しく感じて見たいと思つてゐる。

松島  
宮城縣松島灣一帶の  
桂島  
松島灣の入口を扼す  
る島  
塩釜までは約五軒の  
位置にあり

鹽釜  
宮城縣宮城郡にある  
町  
松島灣の南端に臨む



松島

さういふ水の星では、私は、或夏、松島の桂島に泊つた時のことを忘れない。夜、友人と散歩に出たら、まつ暗な波止場に、島の人が四五人、黙りこくつて蹲まつてゐた。聞いてみると、島に息を引きとりさうな病人があるのに、鹽釜までお醫者さまを迎へにやつた船が、まだ戻らないのだ。といつた。そしてその間にも、ギイギイといふ櫓の音が聞えて來ると、一心に闇の中を透かして見てゐた。私たちもその人たちの氣持に引きこまれて、時々聞える櫓聲に耳を澄ま

木下  
千葉縣印旛郡にある  
町  
利根川  
三國山脈に發源し東  
南に流れて太平洋に  
注ぐ

鎌倉  
神奈川縣鎌倉町  
大佛次郎  
小説家  
本名野尻清彦  
横濱市の人  
明治三十年(二五七)生

してゐた。そして眼は、暗い水の中一面に沈んでゐる星の影を、ぼんやり見てゐたのである。

それから或夏、千葉縣の木下へ行き、利根川の草土手の上に立つて、星の話をした時だつた。眼の下には、夜泊の船が、浮寝鳥のやうにひつそりと繋つてゐて、川面には星が鮮かに映つてゐた。けれど、時々螢が涼風で流れて來ると、水の中の星と見わけがつかないことがあつたのを覚えてゐる。



利根川の土手

冬の星では、大地震の年に、鎌倉で大佛次郎と、沖に現はれ

南極老人星  
冬の間だけ南に低く  
見える星

滑川

鎌倉町を流れ由井ヶ  
濱に注ぐ

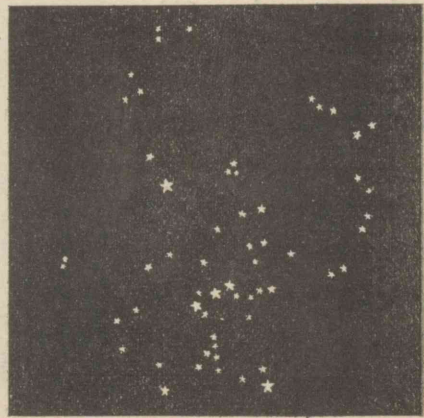
オリオン

星座の名  
三つ星を中心とする  
もの

メイネル

(八四一—九三〇)

英國の女流詩人



座　ン　オ　リ　オ

る筈の南極老人星を見に行つたことがある。途中滑川の  
海岸橋を渡りにかゝつたら、河口の廣い水面に、オリオン始  
め眞冬の豪華な星座が、そつく  
りその儘に映つてゐて、思はず  
足をすくませた。あんなすば  
らしい星の影は、後にも先にも  
見たことがない。

英國の女流作家メイネル夫  
人は「繋がれた星」といふ隨筆の中で、「水は星々を映して、思ふ  
が儘に縮めつ、伸ばしつ、歪めつする巧な畫家である。」といふ  
意味の名文を書いてゐる。けれど、かうして大空の星を復

銀座

東京市京橋區の目抜  
の街

三原橋

東京市京橋區

藤井乙男

國文學者

文學博士

京都帝國大學名譽教

授

兵庫縣の人

明治元年(五二)生

某の島

ベル島を指す

現して見せるだけでも、水はすばらしい畫家だと、私はその  
時に感じたのである。  
そして、この畫家は時に大都會のどぶ川の中にも潜んで  
ゐる。私は銀座へ出ると、時々三原橋まで星を見に行くが  
あすこの水でさへ、ある晩織女の青い光をはつきりと捉へ  
てゐたことを思ひ出す。  
(東京朝日新聞)

### 九 燈臺守

藤井乙男

フランスの西岸に近き某の島に燈臺あり。マトローと  
言ふ者これを守りぬ。

或日、マトローは燈臺に上りて、常の如く掃除をなした

りしが俄かに重き病氣起り、掃除半ばにして己の室に下り、其のまゝ床に就けり。マトローの妻は心をつくして夫を看護せしが、病、些かもおこたらず、氣息奄々として死期の遠からざるを覚えぬ。醫藥効を見ず、頼む所はたゞ神のみ。妻はひたすら神に祈りぬ。

とかくする程に、夕暮は迫りぬ。黄昏の色はやうく海を蔽ひぬ。病の床は離るべからず。床を離るれば瀕死の夫を如何にせん。燈臺の燈は點ぜざるべからず。燈を點ぜずば、夜の船路のしるべを如何にせん。夕暮は益、深くなりぬ。黄昏は海を蔽ひ盡くしぬ。「我等の務なり、我等の務なり。務は曠しうすべからず。」妻は斯く思ひ定めぬ。斯

臺台

盡尽

て夫の病床を後に、心引かるゝ身を起して、妻は燈臺に上りぬ。燈は明かに海上の闇を照らせり。夜の船路のしるべとして、明かに海上の闇を照らせり。

妻は急ぎて夫の室に歸り、氣遣はしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何事を見し。最後の息は此の時既に絶えて、冷たき唇は見るゝ色を變じ行けるなりき。妻は顔を掩ひて心ゆくばかり泣きぬ。



臺 燈

兒

折しも一人の兒驅け來りて、燈臺の燈の回轉せざるよしを告げぬ。此の燈臺は回轉式のものなるを、マトローが掃除中に機を外したるまゝ下りければ、さては斯く回轉せざるなりけり。

「若し捨て置かば、行きかふ船の見誤りて、如何なる椿事もや起らん。捨て置くべきにあらず」と、妻は夫の骸を守りもあへず、直ちに臺に至りて機を装置せんとせしが、幾度試みても、機は外れて依然として回轉せず。今はせん術なく、十歳を上なる二人の兒を呼び、其の小さき手もて、夜もすがら燈を回轉せしめぬ。燈は回轉しつゝ、海上の闇を照らせり。夜の船路のしるべとして、回轉しつゝ、海上の闇を照らせり。

悲しき一夜は斯くて明けぬ。此の夜安全に島邊を航せし船は、只常の如く明かに常の如く回轉せる此の燈臺の燈光を望み見しのみにて、健氣なる妻と子との心盡くしの如何ばかりなりしかを想はざりしなるべし。何ぞ知らん、明かなる燈光は、これ悲しき妻の眞心の光にして、回轉せる燈影は、これいぢらしき兒等の夜の目も合はさず務めたる丹誠の働なりしことを。

此の夜のことは、後に至りて傳へられ、世人は擧りて此の健氣なる行爲を賞揚し、幾多の新聞社は此の誠意公に奉じたる母子の爲に義金を募りぬ。

嗚呼、ありし一夜の燈光は、如何に清き光を放ちて、島邊の

爲一為

暗き波の上に影美しく輝きけん。

(東京朝日新聞)

吉田絃二郎

文學者

早稻田大學教授

名は源次郎

佐賀縣の人

明治十九年(三四)生

坪内先生

名は雄藏

逍遙と號す

文學博士

文學者

昭和十年(三五)歿

年七十七

熱海

静岡縣伊豆の東北隅

### 一〇 雙柿舎の翁

吉田絃二郎

熱海の町を越して伊豆の海を一眼に見晴す山上に、坪内先生の雙柿舎といふお邸があります。お座敷の前のお庭に三百年も経つたほどの大きな柿の木が二本、小徑をはさんですく／＼と立つてゐます。先生はこの柿の木を非常にお可愛がりになつて、お住ひの名をも雙柿舎とおつけになりました。

雙柿舎の柿の下に、先生は大事な御本を入れるための書庫をお建てなさいました。書庫と言つても昔の塔の形をした建物で、遠くから眺めますと、大和あたりの古いお寺の五重の塔を見るやうな如何にも落着いた感じのいゝものであります。



雙柿舎の柿と坪内逍遙

先生は、その塔の圖面が出来上つた時、すぐに職人を呼んで基礎工事をお始めになりました。そしてまるで子供のやうに、塔の出来上る日を

待つてお出でになりました。

毎日仕事場に來て働いてゐる職人たちの中に、金作とい



セメント  
土木建築材料として  
使用する接合劑

ふ少年がゐました。金作は熱海から十二軒ばかり離れた漁村の子供でしたが、石を運んだり、セメントを捏ね廻したりして、まめまめしく立ち働いてゐました。

先生は、金作が足場の上を駈け廻つたり、猿のやうに塔の上に駈けのぼつて行つたりする姿をほゝ笑みながら眺めてお出ででした。

『あの子はなか／＼可愛い子だ。よく忠實に働くよ！』と言つては、奥さまと一緒に芝生の上に立つて、金作を眺めてお出でになりました。

先生は、大事にしていらつしやる二本の柿の木が傷つけられるたびに、寂しいお顔をなさいました。若い職人たち

は、材料を運んで来ては、容赦もなく柿の幹や枝に打ちつけました。

或朝先生が朝早く庭を御覽になると、二本の柿の幹を薙で巻いてゐる者がありました。まだ一人の職人も見えて居ませんでしたので、不思議に思つて近づいて御覽なさると、それは例の少年の金作なのでした。

いよく塔の屋根を葺く時の事でありました。枝もたわゝに寶石のやうに美しく柿の實がなつてゐました。先生は、毎朝楽しみに其の柿の實や面白い枝振を眺めてお出でになりました。

けれども、塔の屋根を葺くのに、その枝が邪魔になつて仕

方がありませんでした。職人たちは情容赦もなくその枝を折らうとしました。その時、大人たちの後に立つてゐた



ど繃帯でも巻くやうに。

金作は、その職人の前に飛んで出て「ちよつとお待ちよ。」と言ひました。みんなが「何をするのだらう。」と思つて見てゐますと、金作はするすると柿の木にのぼつて行きました。そしてくるくるとその柿の枝を、巧く繃帯で巻いてしまひました。ちやうど繃帯でも巻くやうに。金作は、さらに一本の繩をその枝

に結びつけて、しづかに一米ばかり塔の足場から外れるやうに脇の方へ引きつけました。

「成程なあ。子供には叶はぬわい。」と親方たちは頭を搔きました。到頭その柿の枝はすこしも傷めないうで、先生のお庭の塔が出来あがりました。

「あんたは柿の木の恩人だよ！」と言つて、先生は嬉しさうに金作の頭を撫でておやりになりました。

先生の塔が出来上つてから四五年後のことでもあります。日本の兵隊さん達は満洲に出かけてゆきました。金作も、その時は立派な兵隊さんになつて出征しました。金作君は、村の人たちに送られて熱海の驛から出立しました。冬

の寒い朝でした。まだ夜が明けたばかりの頃でしたが、金作君は、ふと一人の老人が手に國旗を持つて、村の人たちの後ろの方の雪の中に立つてゐるのを見ました。坪内先生の優しい眼が、じつと金作君を見守つてゐるのでした。金作君は餘りの有難さに涙がこみ上げて來て仕方がありませんでした。

熱河

滿洲國熱河省の首都

熱河の戦が終る頃でした。金作君は内地からの小包郵便を受取りました。中には箱に入れた美しい腕時計が一つ入つてゐました。箱の上には、柿の木小舎の翁より」と書いてありました。先生は御自分のことを、何時も「雙柿舎の翁」と呼んでをられました。

金作君が、先生からの御手厚い贈物を戴いて、一層勇敢に滿洲の野を駈け廻つたことは言ふまでもありません。

(少年俱樂部)

徳富健次郎

小説家

蘆花と號す

熊本縣の人

昭和二年(一九二七)歿

年六十

文殊寺

京都府與謝郡

天橋立切戸

臨濟宗の寺

切戸の渡し

天の橋立は元來對岸まで續き居りしが、打切れたために水路を生ず。これが切戸にて長さ五十米餘天の橋立附近



一一月夜の天橋

徳富健次郎

今宵は陰曆十月十四日の月夜である。文殊寺の附近は松影で墨の様に眞黒い。此處に車を待たせて、天橋に渡るべく舟に乗る。所謂切戸の渡しである。ぎいと櫓が響いて、舟は墨染の濃い松影から、白々とした月下の海に出た。海と云うても、浅い洲の上の水である。何といふ良い月夜か、雲一つない空にばかり照るかと思へば、水中にも天があ

併一併

天の橋立  
京都府丹後國與謝の  
海の中央に突出せる  
一沙洲  
日本三景の一



舟から上つて踏む白砂は、もう天の橋立である。此處ら

つて、其處にも月は壁の如く光つて居る。何といふ清い水  
だらう。月明りにも水底の砂が  
分明ぶんめいに數へられる。此處は橋立、  
切戸の渡しか。若しくは天の河  
を今渡りつゝあるのではあるま  
いか。「船頭よ、緩ゆるかに船をやつて  
くれ。もつと徐かにやつてくれ。」  
併し如何程徐かに舟をやつても、  
彼岸は近い。するくくと舟はも  
う天橋の渚しづに着いてしまつた。

踏一踏

ピン  
留針  
數一數

は植ゑついて間もないと見え、松は稚木で疎らである。月  
光あかりに雪と輝く砂を踏んで、だんだん  
奥へと入つて行く。十一月中旬と  
いふに、蟲の音がする。歩むにつれ  
て、松影はだんく深くなり、はては  
月光よりも松の影が多くなつた。  
何といふ明るい月だらう。仰げば、  
松の一片々々が、白金のピンを數へ  
る如くよまれ、俯く砂には、一葉々々  
の影が黒く鮮かによみ得られる。  
松間まつまの道の曲る處に来る。余は



天の橋立

與謝の海  
京都府與謝郡の沿海  
即ち宮津灣

一里  
約四軒

二間  
一間は約一米八〇程

ベンチ  
長腰掛

ルビー  
紅玉

宮津  
宮津灣に臨み天の橋  
立の對岸にある港町

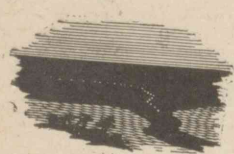
松の幹に倚つて立ち、妻は砂に蹲踞んだ。余は黙し、妻も黙す。寂然した天の橋立に人籟絶えて、唯何處からともなく、ざあくといふ響がする。松風か否、足下の松影は、濃い墨もて描いたやうに少しも動かぬ。響は與謝の海が、天橋一里の白砂を舐める響に外ならぬのである。其の響にひかれて、汀に出て見る。其處に二間ばかりの花崗岩のベンチがある。並んで腰を掛ける。月下にほの白く眠る與謝の海。その懷に壁のやうな月を抱き、寢息かとはかり、ざぶり又ざぶりと白砂にこぼれる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に、半圓形に山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と縁を縁取つて居るのは、あれは宮津の町である。

龍竜

灣

龍燈

海上に篝火の燈の如くに連なり現はるるもの  
こゝは宮津灣頭の燈火を譬へて言ふ



不圖、此方の海の上に、不思議なものが現はれた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ、老大な横長い物である。龍宮城の出現——と見る間に、それは宮津の方へと動いて行く。龍宮城が移動すると見たは、それは今日の最終の連絡船が宮津を指して行くのであつた。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城は、あの宮津灣頭、百千の龍燈、晃めく邊に、びたりと着いてしまつた。あとは唯、慰したやうな與謝の海。照りまさる月の空と相見て相抱き、一里の松原、枝も鳴らさぬ天の橋立の長い汀に沿うて、ざぶり又ざぶりと、漣のさゝめくばかりである。

汀から又松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくさ

蟲 虫

くと砂を踏む二人が足音の絶え間に、波のさざめきが慕うて来る。幽かに蟲の音がする。松影は益、深くなつて、はては砂の上にこぼれる月影が、ちら〜と螢ほどに細かく疎らになつた。と見ると、此處に寂然と鎮まります社がある。大方、橋立明神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つて居ない。二人は其處の松に倚りかゝつて、黙つてやゝ久しく立つた。

「歸るか。」  
「えゝ。」  
此の言葉の交はされたのは、大分經つてからであつた。人界に居る我等は、月の天橋からさへも歩を返さねばならぬ。

(死の蔭に)

歸 帰

蘆 芦

信濃川  
信濃(長野縣)の千曲川・犀川の二川が合流し新潟縣に入ればこれを信濃川といふ新潟縣を貫いて新潟市にいたり海に注ぐ流長三六九軒

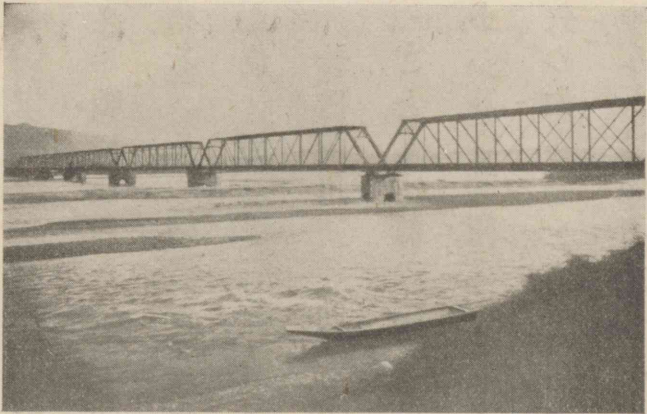


一二 王瀬長者

兩岸の蘆荻が、吹く秋風に靡いて、葉ずれの音が寂しく聞える頃になると、信濃川の水も、水晶を碎いたやうに澄んで来る。その頃になると、腹に子を持つた海の大鮭小鮭は漸く荒れ狂ふ棲所を捨てて、信濃川へと上り来るのであつた。昔、信濃川に、「大助小助」といふ鮭が棲んでゐた。鱗光銀盤のごとく、丈餘の長身に水を切つて川を上下する時には、大の如き瀬を上り、或は底知れぬ淵に鱗を休めた。獨り鮭のみかは、他の大小魚介苟も信濃川に棲むものは、皆この大助小助の威におされて、或は迎へ、或は送るに努めぬものと

霜月十五日  
この頃が鮭漁に最も  
よき季節にて捕獲も  
多し。それを大助・  
小助への遠慮より特  
に一日休業せしもの  
ならん

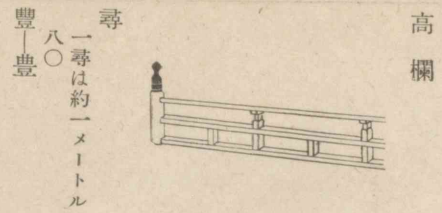
寶一宝



てはなかつた。流石に、漁士<sup>れいし</sup>までも霜月の十五日だけは、大助・小助に憚つて、網をおろすことはしなかつた。  
信 その頃、王瀬長者と言ふ長者が  
濃 ゐた。家に財寶充ちて、着るに綾  
川 羅あり、食ふに珍味あり。一度、善  
美を盡くした宮殿の如き邸宅か  
ら窓外を望めば、長者の持地<sup>もちぢ</sup>は、渺  
漠として視界に餘り、その富、その  
威、近郷に及ぶものとは無かつ  
た。權貴に誇る者が、他にこれに頽頽する者のあるのを見

出すことは、不快な事に相違ない。その不快は嫉妬となり、憤恨となり、嗔<sup>しん</sup>恚<sup>い</sup>となり、果ては干戈に委しても、對者を除かうと考へるのは、常の世に於ける、常の人の常の行であつた。王瀬長者が、魚族の大助小助に、憎惡怨恨の血を湧かせたのも、亦その心理から、當然免れ得ない結果であつたらしい。  
霜月十五日の前夜、長者は、附近の漁士數十百人を集め、明日を期して、大助小助を捕獲すべきことを命じた。長い間の慣例を破り、川の主を捕へる、其の大それた長者の無謀には、呆れ戦<sup>まろ</sup>かぬ者とはなかつたが、さて、誰一人それを諫止しようとするものはなかつた。それ程、長者の權幕は恐しく且つ興奮してゐた。

權一權



其の晩、長者は夢を見た。それは、大助・小助が夢枕に立つて、「どうぞ、そんな情ない事は思ひ止つて貰ひたい」と懇願する夢であつた。それも、一夜に三度まで夢枕に現はれてのことであつたが、遂に長者の意志を飜へすことは出来なかつた。愈、其の日は來た。朝來、北の國には珍しい秋晴れの日で、船を漕ぐ音も、清々しい朝の川面に、心地よく響いた。高欄に凭れて、己が權威の程を思ひ知らせようと、遠く、川面に、二百尋に餘る大網下ろす漁士の姿を眺めやつてゐた長者の顔には、抑へても抑へ切れぬ會心の笑が溢れてゐた。漁は豊かであつた。白砂を埋める鱗光は、瞬く間に陽光に銀の如く輝き積まれた。然し、釣瓶落しの秋の日が、赤々

と川も空も爛らさせて西へ落ちる頃になつても、肝腎な大助・小助の姿は、網の中には見られなかつた。期待は遂に破れた。權威を誇るものが、それが絶対にない事を發見した時の憤懣失望は、世にも凄いものであらねばならぬ。措くに處なき絶望と、憤恨に悶える長者は、大盃をひいて鯨飲を續けたが、それしきの事で到底癒さるべきでなかつた。其の時も時夜更けの長者の家の門を凄まじく叩くものがある。「この深夜に、何者ぞ」



碑の者長瀬王



勞一勞

と若者共が立ち出て見れば、人もあらうに、顔容卑しからぬ一人の老婆。それが、『今日は御苦勞さまだつた。』と傳へ給へ。と言ひも終らぬうちに、姿ははや闇に消えて、遙か彼方の川邊に當つて、物の飛込むやうな音がした。老婆は勿論大助・小助の化身であつた。

其の後、大助・小助は、永く長者の一家に禍した。田では稲が實らず、川では持舟が時々覆つた。さすがに權貴を誇つた長者の家も、うち續く災禍に、遂に没落のはかない運命を免れ得なかつた。

新潟市沼垂町ぬかたの郊外に一基の古碑があつた。それはこの長者のはかない運命かたみの記念であると言はれた。今は、そ

沼垂町  
信濃川の右岸にある

の古碑も移されて、同じ沼垂町の法光院境内に置かれ、春風の秋雨幾星霜苔蒸す下に悲しい傳説を秘めてゐる。

(中野城水の文に據る)

千家元麿

詩人  
東京の人  
明治二十一年(三五四)  
生

一三白 菊

優れしものよ

千家元麿



菊 白

白菊よ

汝は品よく落着いて  
我がのぞみにもかなひたり。

静かな夜の燈火に

ああ、白菊は、牙々と汝はもの言ふごとくなり

心あるべし、白菊は

氣高く澄める白菊は、

汝を見てより我が心

昂りやまず涙ぐみ

氣高き汝を思ふなり。



白 菊 土佐光起筆

芳賀矢一

國文學者  
文學博士  
東京帝國大學名譽教  
授  
國學院大學長

昭和二年（天七）薨  
年六十一

平治の亂

第七十八代二條天皇  
の平治元年（八七）に  
藤原信賴・源義朝等  
が大内に據つて亂を  
なし、平清盛これを  
討つ。信賴等は敗れ  
て義朝・信賴は誅せ  
られる。

源 義朝

爲朝の子  
この時三十八歳

尾張國

長 田  
知多郡野間をさす

義朝の家臣

ああ白菊よ、白菊よ、

汝は靈あるものならめ

清き白菊、牙えし白菊。

（千家元麿詩集）

### 一四 雪中物語

常磐御前

芳賀矢一

平治の亂に源義朝は一敗地に塗れ、東國さして落ち延び  
ようとしたが、長田が返り忠に尾張國で討たれた。前の右  
兵衛佐頼朝も彌平兵衛宗清の手に生捕られ、二男中宮進朝  
長も首になつて六波羅に着いた。夜叉御前とて十一歳の  
女子「わらはも義朝の子なり」とて、一人宿を立出でて、杭瀬川

頼朝

義朝の第三子  
この時十三歳

六波羅

いま京都市下京區の  
内。六波羅密寺・方  
廣寺邊の地域。平家  
の六波羅殿の舊址

杭瀬川

岐阜縣揖斐川の別稱

九條院

第七十六代近衛天皇  
の皇后藤原呈子

に身を投げて死んだ。

「此の外に、九條院の雜仕常磐の腹に三人の男子があるはず」と、嚴しい詮索。常磐はこれを聞いて「身一つにてさへ忍びがたきに三人の子供を引具しては、誰かは暫しも宿貸すべき。先づ年頃頼み奉りたる観音にこそ歎き申さめ」とて、八つになる今若を前に立て、六つの乙若の手を引き、牛若は二つなれば懐に入れて、たそがれ時、人に顔見られぬをしほに、足に任せて宿所を出た。佛前にまゐつても、二人の子供を脇に据ゑて、泣くく終夜の祈請を遂げた。日頃は左馬頭が最愛の妻とて、供人まで綺羅を飾つたが、今はそれに引換へて、身も襦袢、歎きに泣きしをれた姿、目も當てられぬ。

大和國

いま奈良縣に屬す

二月十日

永曆元年(一六二〇)

惱一惱

師の僧もあはれに思つて、暫しは忍びておはしませ」と慰めたが、常磐此處は六波羅近ければ、暫しとても安心なりがたし。まことに忘れ給はずば、観音によく祈り賜はり候へ」とて、大和國宇陀郡を心あてに南を指して歩み出した。

二月十日のことなれば、空吹く風もなほ寒く、



常椋 磐本 雪瀨 行舞 の子 圖筆

路行く足は雪に破れ、露と争ふ涙には、袂も袖も絞るばかり。一人を懐に、二人の子の手を引きく、腰を押へて行き惱む有様、見知らぬ人々も哀を催さぬ者はなかつた。

屋島一八島  
香川縣木田郡湯元村  
高松市の東二軒  
壽永三年に平宗盛が  
安徳天皇を奉じて此  
の地に移り、源義經  
の兵と戦ひて敗る  
壇の浦

山口縣下關市の東  
端、壽永四年三月に  
義經等が平家の一門  
を滅しし所

源義經

義朝の第八子

兄頼朝の命により義

仲及び平氏を滅ぼす

後頼朝に忌まれ陸奥

に赴き藤原秀衡によ

りしが、秀衡の死後

藤原泰衡のために斃

さる。時に文治五年

(一一八七)年三十一

嗣信・忠信

姓は佐藤

陸奥の人

教經

平教經

剛勇の士

壇の浦の戦(八四五)に

死す

年二十六

治承二年

高倉天皇の御代  
紀元一八三八年

信夫  
福島縣岩代國信夫郡

經一經

此の懐の一子こそ、後には源氏の武將として、平氏を屋島壇の浦に殲みえころしにして、父祖の仇を報いた義經である。

雪深き山ふところのちござくら

花咲かんとは思ひかけきや。

靜御前

幼時母の懐に抱かれたと同様な吉野山の雪踏み、義經の末路は實に哀であつた。吉野山の大眾は頼朝方の咎を恐れ、講堂に打寄つて討取る詮議最中。奥州から従ひ來つた二人の兄弟、兄嗣信は八島の戦に能登守教經の矢に斃れて、其の弟の忠信、雪の上に跪いて言ふには、「我等が今の身の上は、屠所に歩む羊に異ならず。君は早く落ち延びさせ給へ。」

忠信こゝに踏止つて、一方の防矢仕らんといふ。義經志は嬉しけれども、兄嗣信の討たれし後も、其方一人あれば、なほ兄弟揃へる心地したり。年の内は幾程もなし。來春は陸奥に下らんと思へば、其方も永らへて、秀衡にも會ひ、國に遣したる汝の妻子をも見よといふ。忠信承つて、「治承二年、陸奥を出でし日より、君に命を奉つて、名を、後代に揚げよ。矢に當り死せりと聞かば、秀衡供養すべし」と教訓を承れり。信夫の里に残しし老母一人あり。これも、其の時を最後まで申し切つてあれば、生きて故郷に歸らんとも存せずと、決心した言葉に、義經は日頃身に着けた太刀鎧を與へ、自らは忠信が鎧を着て、大和路さして落ちて行つた。

懐にふしみの雪をみよしのの  
袖ふる山に思ひいづらん。

吉野までは静御前は同行したが、これも此處にて義經に別れ、女道のたゞ一人、雪踏分けて辿り行く。穿いた靴は雪に取られ、着た笠は風に奪はれて、足から流れる血は吉野山の白雪に點々の紅を洒いだ。

さて、其の後鎌倉に召出されて、「義經の行方を申せ」との詮議。且つは、「白拍子の舞を一曲奏てよ」との右幕下の嚴命に、立上つた舞の姿。

しづやしづしづの苧環くり返し

昔を今になすよしもがな。

鎌倉

神奈川縣

白拍子の舞

水干を着。立烏帽子を戴き。白鞘巻をさして舞ふ女舞のこと。次の頁の挿圖を見よ

工藤祐經

源 頼朝の臣。建久四年五月(八五)曾我兄弟に殺さる

梶原景時

頼朝の寵臣。正治二年(六〇)歿

畠山重忠

武藏の人

頼朝に仕へて幕府創業の元勳。元久三年(六六)歿、年四十二

關八州

關東八州

箱根以東利根川系に屬する相模・武藏・安房・上野・下野・上總・下總・常陸の八國今の關東地方

六十六國

我が國の古昔は六十六國に區劃せらる。日本六十餘州などと稱せらる

つゞいて

吉野山峰の白雪

ふみわけて

入りにし人の跡ぞ戀しき。

と、古歌を少しもぢつて義經

を慕ふ貞操の志。工藤祐經

に鼓を打たせ、梶原景時に銅

拍子を打たせ、畠山重忠に笛

を吹かせ、關八州の勇者を眼下に見下した意氣、六十六國を

掌中に握つた右幕下も、其の志ばかりは奪ふ事が出来なかつた。



静 鶴ヶ岡に歌に  
松 本 楓 湖 舞 筈

久米正雄

文學者

長野縣上田の人  
明治廿四年(三五)生

ユニオンジャック



英國國旗英國の「白地に赤」蘇格蘭の「青地に白」愛蘭の「白地に赤」の三つの十字の交叉を以て併合を表象す

ウエストミンスター寺院

倫敦テムズ河北岸の大寺院  
西暦一〇五〇年建立。皇帝戴冠式の舉行式場。國王其の他名士の墳墓あり

一五 英國皇帝戴冠式の記 久米正雄

六大洲、七つの海、ユニオンジャックの旗が翻ると否とを問はず、東は日出づるわが國より、西は星輝く新大陸の果より、集まり來れる代表使臣三百名、それに主體たる英國皇室貴族、貴顯、上下兩院議員その他を加へて無慮八千人、それ等を美々しくも參列せしめて、今こゝに東西古今を曠しうする英國皇帝のジョージ六世陛下戴冠式は眼前に展開されんとしてゐる。これを人類儀式の超特作と言はんは俗に過ぎ、豪華版といふも言葉足らず。眞に曠古と言ふ外はないと感じた。予は、その全世界の耳目の中心ウエストミン

トリフォリウム  
寺院内の最も美しき部分で、華麗な葉模様があり、その上部には美しき圓窓あり  
下圖を見よ

最後の晩餐の聖畫

イタリアの藝術家レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯の代表作にして、繪畫史上重要な地位を占むる壁畫なり  
△頁の圖を参照

スター寺院の一角トリフォリウム内で、筆持つ手もふるへがちにこの電報を打つ。

この記者席は、恰も寺院の屋根裏ともいふべく、床より約十間の高さにあるが、位置は寺院中央の十字型廣間の北側に當り、行列の入らせられる西側入口寄り外陣及び



ウエストミンスター寺院の内部

内陣合唱席を眞下に見下して、遠く東の正面奥の院なるヘンリー七世禮拜堂を僅かに半面ばかり望み、その後方の扉にかけられた「最後の晩餐」の聖畫も、たゞ仄かに蠟燭の光で



最 後 の 晩 餐  
レオナルド・ダ・ヴィンチ 筆

鈍金色に煙つてゐるばかり。唯その前の高さ祭壇祈禱臺  
更にその横に並べる皇帝と皇后  
の御座席がともかくもはつきり  
見下ろされる。そのまた前中央  
にと立つ戴冠椅子の背が金色  
の影黒く辛うじて覗かれる。十  
字型廣間の中央には、五段高く玉  
座を設け、その左横にやゝ小さき  
皇后の御座が並んでゐる。何れ  
も廣間一杯に敷き詰められた薄樺色の絨氈に赤いへりを  
取り、玉座の椅子の眞紅の色と相俟つて、美しい諧調をなし

シアター  
劇場



御参列の秩父御名代宮内兩殿下

てゐる。  
その中央の廣間全體を「シアター」と呼んでゐるが、これを  
眞に「シアター」とすれば、この舞臺装置は眞に豪華にも優美  
と豪華を極めたものである。  
八時にはもう此の中央廣間  
に、皇族貴族外國使臣席を除  
き、殆ど一杯に今日を晴れの  
参列者が居並んだ。  
八時四十五分になると、い  
よいよ内陣入口の屋上に集まつた管絃樂團がゆるやかな  
奏樂を始める。やがて行列がお着きになつたと見え、英皇



別電

陸軍少佐の御正装も  
凛々しく、大勳位に  
英國のG・C・V・O  
の大綬を御右肩より  
かけさせらる

ダイヤモンド  
金剛石

室の皇族打揃つて、すべて白地に金でだんだらの御衣裳を  
召され、静々と入口よりお進みになる。それにやゝ間を置  
き、肅々と入り來つたのは外國使節の一隊。「それ！」と眸を  
凝らせば、その先頭はまがふ方なきわが秩父宮兩殿下だ。  
殿下は、この日別電の如き御正装、妃殿下は、金欄に菊の御模  
様を寶石で繡取りした御衣裳の裾を長くひかれ、その先き  
を山座御用掛が捧げ參らせ、嚴かに第一番の貫祿を示され、  
内陣中央廣間の近き南側の御座所にお著きになつた。  
そこは、こゝの記者席からもまともに拜され、殿下の御腕  
章嚴めしく、妃殿下のダイヤモンドの光がまばゆく、こゝま  
で届くのも美しき限りである。兩殿下は、御後に續き並ん

コロネーション  
プログラム  
戴冠式次第書き

カンタベリー  
英國國教總本山の所  
在地

寶器  
リゲリーヤ即ち即位  
の寶器

でかけられたベルギー皇弟フランダー伯、次のオランダの  
ユリアナ皇女殿下等と、コロネーション・プログラムを手に  
せられて、ひそやかに御話しある御様子さへ拜された。  
十一時二十分、合唱席の上の電燈がつき、やがてカンタベ  
リー大僧正を先頭に、寶器を捧げしもの後に續き、遂に皇帝  
皇后兩陛下の御行列は現はれた。行列の中程には、ポール  
ドウィン首相やマクドナルド樞相の顔も見え、十一時半、初  
めて合唱隊の歌聲響くと共に、皇后陛下は、銀色衣裳に赤褐  
色の裳裾のへりを白い毛皮で縁取つたのを召され、大人の  
御裳裾持と、一人の侍従及び八人の侍女を従へ、中央の玉座  
の左の御座席に著かれた。續いて皇帝陛下は、緋色のへり

取り裾を、九人の赤き衣裳の附添ひに持たせられてお著きになり、皇后陛下と反對に右に廻つて御著座、時に十一時三十四分。

かくの如くにして席すべて整ふや、カンタベリー大僧正は先づ東の方へ亨利七世の禮拜堂に向ひ、「こゝに行事を御前に進ずるが、喜んでこれを迎へるや」と濫いよく透る聲で述べた。すると、合唱隊は一齊に聲を揃へて、「ゴッド・セイヴ・ジョージ」と答へ、喇叭を鳴らしてこれに合はせた。かくて、大僧正は今度は東西北南と順次にたづねて同じ答を得て、承認式を終つた。

つゞいて十一時四十五分、次の宣誓式に移る。陛下は大

宣誓式

大僧正「陛下は宣誓を行はれるや」

陛下「喜んでこれをなす」

大僧正「誠實と正義をもつて宣誓を行はれるや」

陛下「喜んでこれをなす」

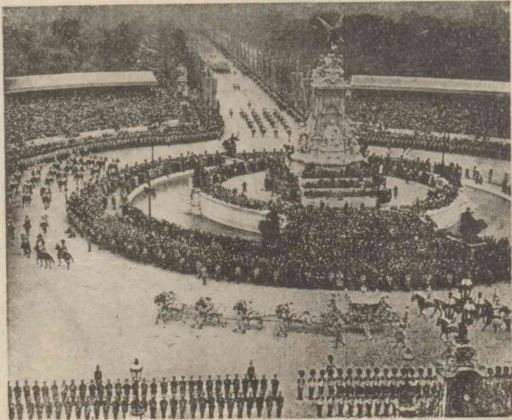
大僧正「この大英帝國を誠實と正義をもつて治むるや否や」

陛下「然り」

宣

言「朕のこゝに約せし事必ずこれを遂行し且つ奉仕せん。されば神よ、朕を助けよ」

聖書に手を置き、宣言の後、聖書に接吻して、大僧正の捧げる銀の文笥よりペンを取りて宣誓書に署名された。それが濟むのを待つて、型の如く聖餐式あり。僧侶の讀經祝福の後、愈、聖油式となつた。大僧正が別な衣を皇帝にお著せ申すと、正面の戴冠椅子につかせられ、その上を、四人の貴族が金色の天蓋をもつて進み出でその椅子を掩うた。すると、大僧正は、ウェスト、ミンスター管長の差出す匙と油をとつて、先づ初めに皇帝の御手、次に御胸、續いて御頭と、十字



列行御の下陛下兩后皇帝皇

型に神聖な油を注いで式を終つた。



ガウン  
法服

かくて天蓋を取去り、再び又白の襟飾のある袖のない外套様の服と金色のガウンの如き衣を著せ奉り、寶劍・十字章・寶珠・指環及び十字章の笏並に鳩章の笏授與式だ。かくて冠式愈、眼目の戴冠式は迫つた。午後零時三十分、ウエストミンスター管長が、恭しく王冠を大僧正に差出せば、大僧正は徐ろにこれを取上げて次のやうに宣した。

神よ、誠實の冠たれ。神よ、願はくは、神の僕にしてまた我

等の王たるジョージの上に祝福を垂れさせ給へ。今ここに彼の頭上に光輝ある黄金の冠を戴かしむるに當り、神の無邊の榮光をもつて心旺んならしめ給ひ、しかして我等の主、永久のイエスキリストの恵みによつて、一切の御徳を完成せしめ給へ。

そして陛下の御頭上にお戴せした瞬間、合唱隊並に參列者は聲を揃へて「ゴッド・セイヴァー・キング」を叫び、喇叭隊は堂も搖げと喇叭を吹鳴らし、貴族は各自に持つ冠を一齊に頭にかぶつてこの盛儀を祝福した。なほ樂隊は、神の御名によつて王道を進めとの聖歌を歌つてこの式を完うし、こゝに皇帝は名實ともに英帝國の王位に登らせられたのだ。皇

后陛下戴冠の式も續いて改めて行はせられたが、皇帝の戴冠式の縮圖シュツトウの如きものであるから、こゝに繰返すまい。かくて、全部の式を終了したのは午後一時五分であつた。これより兩陛下は奥にお入りになり、御小憩セウキ後いよく御歸りの行列の華やかな行程ケイゲイにお移り遊ばされた。

(東京日日新聞)

森 鷗外

名は林太郎

醫學博士

文學博士

陸軍軍醫總監

帝室博物館總長

鳥根縣の人

大正十一年(一九二二)薨

年六十一

國分寺

京都府加佐郡由良町の南四軒、中山にありしといふ

三門

寺院の樓門

山椒大夫

京都府加佐郡由良町石浦に住み、多くの奴婢を虐使しむたる長者なりといふ

中山の國分寺の三門に、松明の火影ひかげが亂れて、大勢の人が籠み入つて来る。先きに立つたのは、白柄の薙刀を手挟んだ山椒大夫の息子三郎である。

一六 厨子王

森 鷗 外

由良附近



三郎 山椒大夫の五子のうち三郎最も暴戾なり

三郎は堂の前に立つて大勢に言つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族やからのものぢや。大夫が使ふ奴の一人が、此の山に逃げ込んだのを確かに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐこゝへ出して貰はう。」附いて來た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石畳が續いてゐる。其の石畳の上には、いま手にく松明を持つた三郎の手のものが押合つてゐる。また石畳の兩側には、境内に住んでゐる限りの僧俗がほとんど一人も残らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも庫裡からも何事が

起つたか」と怪しんで出て來たのである。

初め、討手が門外から門をあけい」と叫んだ時、あけて入れたら、亂暴をせられはしまいか」と心配して、あけまいとした僧侶が多かつた。それを、住持曇猛律師があけさせた。併し、いま、三郎が大聲で、逃げた奴を出せ」と言ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりしてゐる。



森 鷗 外

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。手のもの

の中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうくの事で、本堂の戸が静かにあいた。曇猛律師が自分であけたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い岩乗な體と、眉のまだ黒い廉張つた顔とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐ろに口を開いた。騒がしい討手の者も、律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞えた。「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では、住持

偏衫  
法衣の一種



のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、その者は當山にぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人数押寄せて參られ、三門をあけい。」と言はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たか。」と思つて、三門をあけさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれ、と、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。そこを好う思つて見て、早う引取られたが好からう。悪い事は言はぬ。お身たちのためぢや。」かういつて律師はしづ

東大寺  
日本總國分寺  
聖武天皇御建立  
奈良七代寺の一  
華嚴宗の大本山  
本尊は所謂奈良の大佛

かに戸を締めた。

三郎は、本堂の戸を睨んで齒咬みをした。併し戸を打破つて踏込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは、唯風に木の葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此の時、大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつばぢやらう。それなら、わしが知つてゐる。」三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此の寺の鐘樓守である。親爺は詞を繼いで言うた。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てゐると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

繼

築泥

また築地ともかく

田邊  
今の京都府加佐郡舞鶴町  
鐵の受糧器  
鐵鉢

錫杖  
行脚の僧がもつ杖  
錫杖の頭部



山城  
山城國  
いま京都府に屬す  
朱雀野  
いまの京都市下京區  
七條千本通の邊  
昔の朱雀大路の名殘

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。続け。」  
といつて、三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寢ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛立つた。中二日置いて、曇猛律師は田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは、頭を剃りこくつて僧衣を着た厨子王が附いてゆく。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。やがて山城の朱雀野に来て、律師は權現堂で休んで、厨子王に

別れた。

「守本尊を大切にしていって往け、父母の消息はきつと知れる。」  
と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。

都に上つた厨子王は、僧になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

籠堂こもだうに寢て、あくる朝、目が覺めると、直衣ちかほしに烏帽子を着て指貫を穿いた老人が枕元に立つてゐた。「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己おれに見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこゝに參籠した。すると夢にお告があつた。「左の格子に寢てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませい。」と

清水寺  
京都市の東山にある  
寺  
本尊は觀世音菩薩

師實 關白太政大臣藤原師實 後三條・堀河兩天皇の朝に仕へたり 康和三年（天長）薨年六十一

陸奥 今の奥羽地方

安樂寺 福岡縣筑前國筑紫郡宰府町太宰府神社の地にありき

姉 名は安壽

岩代 名は安壽 今福島縣に屬す

越後 越後の國 今新潟縣の大部を占む

佐渡 佐渡島

由良 安壽は弟厨子王を山椒大夫の許から逃れ去らしめし後入水して死す

いふ事ぢや。けさ左の格子に来て見れば、お前がある。どうぞ、己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王はいつた。「わたくしは陸奥掾正氏といふものの子でございます。父は十二年前、筑紫の安樂寺へ往つたきり還らぬさうでございます。母は、其の年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐しい人買ひに取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしは丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくな

放光地藏菩薩 五穀成就の願を旨とする地藏菩薩

百濟國 古の朝鮮の三韓の中の一國

高見王 桓武天皇の皇子の葛原親王の御子 此の高見王の子の高望王の時、平の姓を賜はる

仙洞 太上天皇の御所、こゝは白河法皇をさし奉る

永保

筑紫 白河天皇（七十一）薨の御代の年號

九州の古名

りました。わたくしの持つてゐる守本尊は、此の地藏様でございます。かう言つて守本尊を出して見た。

師實は佛像を手を取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打返し、丁寧に見て言つた。「これはかねて聞き及んだ尊い放光地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初めに、國守の違格に連坐して筑紫へ左遷された平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一緒に館



へ來い。」

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免状を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し此の使が往つた時は、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名のつてゐる厨子王は、身が窶れる程歎いた。

其の年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買をさしとめた。そこで、山椒大夫も悉くその奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫の家では、一時それを大きな損失のやうに思つたが、

除目

任官の儀式  
秋の除目は中央政府  
の官吏を、春の除目  
は地方官の任命をす  
るのが常例

假寧

官吏に賜ふ休暇  
雜太  
佐渡國雜太郡  
今の佐渡郡雜太町  
佐渡國の中部  
國府川のほとり

此の時から農作も工匠の業も前に増して盛んになつて、一族はいよゝゝ富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太といふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうち、いつか人家の立並んだ處を離れて畑中の道に掛つた。空は好く晴れて、日があかくと照つてゐる。

正道は心の中に「どうしておかあ様の行方が知れないのだらう。」若し役人なんぞに調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで、逢はせて下さらないのではあるまいか。などと思ひながら歩いてゐた。ふと見れば、大分大きな百姓家がある。家の南側の疎らな生垣の内が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、其の上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈取つた粟の穂が干してある。その真中に、襪褌を着た女が坐つて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、此の女に心が惹かれて、立止つて覗いた。女の亂れた髪は塵にまみれてゐる。顔を見れば盲

湧湧

である。正道はひどくあはれに思つた。そのうち、女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に、正道は癩病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾うく逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞き惚れた。そのうち臟腑が煮え返るやうになつて、獣めいた叫びが口から出よ

うとするのを、齒を食ひしばつてこらへた。「忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駈け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手に守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押し當ててゐた。女は雀でない、大きなものが粟をあらしに來たのを知つた。そして、いつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目で見つと前を見た。其の時、干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」といふ叫びが、女の口から出た。二人はびつたり抱き合つた。

(鷗外全集第四卷)

一七 物に添へて

母へ

村岡花子

村岡花子  
 文筆家  
 東京中央放送局囑託  
 山梨縣甲府の人  
 明治二十八年(五五)  
 生

九條武子  
 歌人  
 京都の人  
 男爵九條良致の夫人  
 昭和三年(二五)歿  
 年四十二

今年の寒さは格別のやうに感じられますので、何かとびきりのお暖かい物をお送り申し上げたいと、此の間より心掛けて居りましたが、やはりお珍しくもない毛絲製品をお目にかけます次第、御納め下さいませ。お召しになつた時に、少しかさばりはしないかと、それが氣に懸りますが、餘り暖かさうなものにて、これをお羽織の上よりお召し遊ばされましたなら、防寒としてはどんなに重寶だらうと思はれましたので、求めてまゐりました。

自ら畫がき彫り候もの

九條武子

御すこやかに渡らせられ、めでたく存じ上候。恐しき思  
ひ出の一めぐりと相成り候。その折には、逸早く御同情  
のたまものかずく、頂き、御ま  
ごころのかたじけなさ、言の葉  
に盡くし難う存じをり候。此  
の品まことに御恥かしき出來  
には候へども、せめて御禮心の  
千々の一つにもと、みづから畫  
がき彫り候ものに候。御納め  
給はりたく進じあげ候。かしこ。



耶馬溪

長塚節

文學者  
茨城縣の人  
大正四年(一九一五)歿  
年三十九

卷柿に添へて

長塚節

耶馬溪

大分縣北部、山國川  
の上流及び中流流域  
約五千軒に亘りて展  
開されたる勝地

耶馬溪の名物、卷柿といふものを一つ差上げ申候。頗る  
面白きものに候へども、只今の時候になれば、蟲のつきを  
り候ものもこれあり候につき、その點は保證仕りかね候。  
只どんな品物なるか位の處、御らん下され候ても、一興な  
るべしと存じ申候。

旅行も暑くて困却致し居候。

(山鳥の渡)

坪内逍遙

名は雄藏  
英文學者  
劇作家  
文學博士  
早稻田大學名譽教授  
名古屋の人  
昭和十年(一九三五)歿  
年七十七  
時しも  
文治三年(八四七)  
(吾妻鏡)

一八安宅

坪内逍遙

時しも頃は春のはじめ、風まださむき北國路を、いたはし  
や、義經は、兄頼朝の疑ひをうけ、奥州さして落ちて行く。主  
従わづかに十二人、辨慶を先達<sup>だち</sup>に、山伏姿に身をやつし、日數

安宅

石川縣加賀國能美郡  
插圖は今日傳ふる所  
の關址



主従十二人

辨慶の外、増尾十郎・  
片岡八郎・伊勢の三  
郎・駿河の二郎・常陸  
房海尊など  
山伏装束用具  
兜巾



紫磨金袈裟



ほど經て加賀の國、安宅の港に着きにけり。

義「いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設け  
て、山伏を嚴しく取調ぶる由、如何にすべきぞ。」

辨「これはゆゑしき御大事なり。」

きつとこれにて御工夫あるべし。

人々「いや〜、何程の事かあらん。」

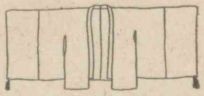
たゞ打破つて御通りあるべし。」

辨「いや〜、打破らんはやすけれども、大事の前の小事なれば、なるべくは穩かなる手段を



安宅關址

鈴懸



はばき



笈



富樫左衛門

鎮守府將軍藤原利仁  
の裔孫、石川縣加賀  
國石川郡野々市村に  
居城した

取りたし。」

義「然らば辨慶、ともかくも其の方の工夫に任せん。宜しく  
計らひくれよ。」

辨「畏つて候。先づ考へ出したることは、我等かく山伏に身  
をやつせども、包みがたきは我が君の御品格なり。畏れ  
ながら暫く強力に御身をやつされ、御笠深く召され、我等  
の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さ  
なくば、忽ちに見出だされ候はん。」

義「げに〜、これは尤もの事なり。」

姿を窺し主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば關  
の役人富樫左衛門、

富「やあゝ、山伏、關なるぞ、名をなのれ。」

とぞ呼ばはりける。

辨「承つて候。これは奈良東

大寺建立のため、北陸道

を勧進する山伏にて候。」

富「それは殊勝の事なれども、

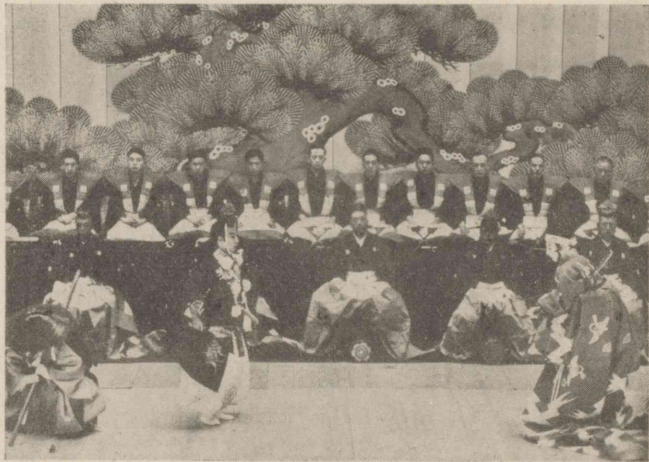
山伏なるからは、此の關は

通しがたし。」

辨「して、其のいはれは。」

富「さればなり。頼朝・義經御

不和により、義經殿には、山伏と姿をかへて奥州へ落ちら



(劇) 帳 進 勧

東大寺  
奈良七大寺の一、治  
承四年(八四〇)十二月  
廿八日平秀衡の爲に  
焼かれた  
北陸道  
畿内の北東、日本海  
に面せる諸國を總べ  
ていふ

る、由。故に新關を設けて、山伏を堅く止むるなり。一  
人も通しがたし。」

辨「承つて候。しかし賈山伏をこそとゞめらるゝならめ。

まことの山伏をとゞめたまふ必要あらじ。」

富「あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の

勧進ならば、勧進帳のあるべき筈ぞ。こゝにてそれを讀

み上げられよ。某これにて聽聞せん。」

辨「何と『勧進帳を讀め』とや。心得申して候。」

固より勧進帳のあらばこそ、笈の中より有合はせの巻物一  
つ取出し、勧進帳と名づけつゝ、即智を以て文を綴り、まこと  
しやかに聲高々と天も響けと讀み上げけり。富慳つくづ

勸  
進帳



紅



隨

強力姿



く聞きすまし、

富「最早疑ひ晴れて候。御通り候へ。」

辨「かたじけなく候。」

げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし、後ろに隨ふ強力を、富慳目早く見咎めて、

富「いや暫く。其の強力は通し難し。とゞまれ。」

と叫びぬ。すは、我が君を怪しむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちどまる。

辨慶騒がずそらとぼけ、

辨「やい、強力め、何とて早く通らぬぞ。」

富「いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨「そは又何故。」

富「あの強力が姿、義經殿に似たる故なり。」

辨「奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しか言はるゝ強力めは、一生の名譽ならんが、さりとは腹立たしや。けふの中に

能登境まで行かんと思へばこそ、強力やとひたるに、わづかの笈を重げに負ひて、人々に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し、いで懲らしてくれん。」

金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。「これはと驚く人人を、辨慶目にて制しとめ、尙ほも激しく打ち据うる。富慳やうやく疑念をとき、

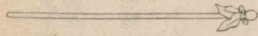
富「これは我等があやまりなり。其の強力には構ひなし。」

譽

能登

能登の國  
いま石川縣に屬す

金剛杖



奥州  
山形縣鼠ヶ關・福島縣白河關及び勿來關以北  
今の奥羽地方をさしていふ

疾くく。一同御通りあれ。  
言ふに人々ほつと息毒蛇の口を逃れし思ひ、さらばさらばと立上り、關路をあとにしづくくと、奥州さして下りけり。

一九 父上のおん手の詩 山村暮鳥

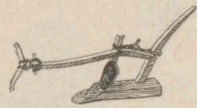
さうだ

父の手といふよりも寧ろ大きな馬鋤からすきだ

合掌することもなければ

無論他人ひとのものを盜掠かすめることも知らない手

生れたままの百姓の手



山村暮鳥  
詩人  
本名土田八九十  
群馬縣の人  
大正十三年（五四）歿  
年四十一  
馬鋤

まるで地べたの中からでも掘りだした木の根つ

このやうな手だ

人間のこれがまことの手であるか

ひとは自分の父を馬鹿だといふ

ひとは自分の父を聖人だといふ

なんでもいい

唯その父の手をおもふと、自分の胸は一ぱいになる。

その手をみると、自分はなみだで洗ひたくなる。

然しその手は自分を力強くする

此處からは遠い山の麓のふるさとに



いまもその手は骨と皮ばかりになつて  
 猶ほもこの寒天の瘦せた畑地を耕作してゐる  
 ああ自分は何にも言はない  
 自分はその土だらけの手をとつて押戴き  
 此處ではるかにその手に熱い接吻をしてゐる

(現代詩人全集)

橘 南谿

文學者・醫者  
 宮川氏 名は春暉  
 伊勢の人  
 文化二年(一四五)歿  
 年五十三  
 薩摩國  
 鹿兒島縣の國名

二〇 孝行

橘 南谿

孝子太郎八竝に妹まん龜は、薩摩國鹿兒島郡小山田村といふ所の農、治右衛門が子なり。太郎八當年十四歳、まん龜は十二歳なり。幼少の時より二人とも孝心にして、生れつ

き柔和に、兩親の事かりそめにも忘るゝ事なかりき。

去る酉の九月  
 第一百十八代後桃園天皇の御代  
 安永六年(一四七)九月



谿 南 谿

去る酉の九月、兄太郎八は九歳、妹まん龜は七つるとき、其の母産後いまだ日數たゞざりしに、時節の事なれば、稻取入のため田へ出でて働きしに、血の道の病南さしおこりそれよりいろく養生せしかども、さらに心よからず今年まで六箇年が間床に付き、やうやうに病につかれ、起臥さへ自身にならざるに、ふたりの子ども、幼少ながら、常に母の側に付きそひ、起臥の手傳より、食物の事に至るまでこまやかに

氣をかけ、母の不自由のなきやうにこしらへ、「病中の事なれば、母に心を使はせ、又は腹立たせてはあしかるべし」とて、たとへ如何やうの無理なる事ありても、「あい／＼」とのみきげんよく返事して、少しも母の氣にさからはぬやうにせり。

元來貧農のことなれば、少しばかりの田畠なるが、太郎八幼少ながら耕作の事をも力めけり。留守のことは、妹に言ひふくめて氣をつけさせけり。妹もまたかひ／＼しく心を盡くし、其の孝養兄におとらず。太郎八も夕方早く歸り、先づ其のまゝにて母のそばへ寄りそひ、手を握り、顔をなで、其の日の母の氣色くはしく尋ね、又我が田地のやうす、其の日にありし事をもかたり聞かせ、粟の穂又はから芋などを

から芋  
唐芋にて薩摩芋をい  
ふ

出して母に見せ、とかくして覺えず時を移し、つひに夕飯をも忘れし事多かりしとなり。夏の夜など、農民の藁屋、殊に蚊帳の中一しほあつければ、母も不便に思ひ、再三太郎八に「蚊帳の外へ出て夕飯たべよ」といへど、嘶すまざる間は飯を食はず。嘶しまひて夕飯を食ひ、又蚊帳の中へ入りて側に付きそひ、靜かに母を扇ぎ、心よく世間嘶などして、其の身もち打くつろぎたる様子を見れば、母も太郎八とはなしをするにて、病の苦しみを忘れしとぞ。

扱眠る前には、兄弟の子供、我が耳を母の顔へよせて右と左に添ひ臥し、萬一夜中寢入りたる間に、母の氣分にて悪しく、呼び起す時は早く目のさむるやうに心得してぞふし

ける。又冬など寒き夜はみづから帯をとき、母の足を懐へ入れ、抱きてあたため、又母氣分悪しく痛みなどさし起り苦しむ時には、兄弟打寄り脊中をさすり、手に取付き、みづから薬を口に含み母に飲ませ、泣き悲しみ、幼な心の氣遣ふ様子、傍より見るには、其の病人よりも却つて兄弟の子供の方哀れにて、あたりの者共も力を添へて介抱してぞ遣しける。母の、かくの如く、子供のかいほうにて、貧しき中にも遂に不如意の事を覺えず、病中に六箇年の月日を送りしに、其の病日々に重りて、今年の五月空しくなりぬ。兄弟の子供の歎き中々言はん方なく、さてあるべきにあらねば、親類打寄り葬送の事を營みしに、兩人の子供悲しみ歎きて、今生にての

母の顔をみる事これまでなれば、葬送の期を一日なりとも延べたし。とて、晝夜母の戸の側を離れず泣き沈みしかば、此の體を見聞く人々涙を流さざるはなし。

これより先き、去年八月十八日、郡奉行得能左平次とかや、勸農の爲に村方巡行の時、小山田村の道の傍に十二三歳の小兒草を刈りて居たるを見て、ねんごろに言ひ慰めて通らなければ、後に従ひし庄屋三島喜左衛門、此の小兒は當村の太郎八と申すものにて、しかくの孝子なり。とつぶさに語りければ、得能氏感心ありて、其の夜の旅宿にて、また此の事を尋ねられけるに、宿の女房よく知り居て、悉しくぞ物語しける。其の次第、庄屋の申す所に少しも相違なければ、其の

去年  
天明元年(四四)

夜近邊の農民を召集めて、此の事を聞き糺されしに、孝行いよいよ相違なかりしかば、翌日、得能氏自身太郎八の家にいたり、其のやうすを見分し、又其の父母を尋ねとふに、露たがはざりければ、早速濃やかに書附けて、太守へ言上ありしに、太守も奇特に思召し、御褒美として、兄太郎八に米二十五俵、いもとまん龜にぜに五匁文をぞ賜ひける。母もその頃は病やゝ重り居けれども、尙ほ世に在りし程のこととて、あまり有難さに、人々に扶けられて起きあがり、賜をいたゞきしとぞ。

右御褒美たまひけると、近村の農民馬數十疋におはせ、太郎八が家にはこびきたりしかば、これが孝子への御褒美

なり。と、遠近の人々たちつどひ、褒め羨まざるはなし。得能氏よりも、錢一匁文を與へられしかば、庄屋・村役の人、其のほか近きあたりの寺々まで、思ひくゝにそれづゝのものを與へ贈りぬ。得能氏、勸善のためにとて、そのほとりの男女に命じて、太郎八が家にゆきて慶びを言はしめ、また上よりの賜を拜見せしめらる。このことつひに國中かくれなく、人みな兄弟の子どもの孝行を稱美し、兄を孝太郎とよび、妹をお孝と名附ける。

われ、近年、醫術修業のため諸國にあそび、薩摩の國にし、し逗留の折ふし、増田熊助なる人、此の事を稱歎せらるゝを聞き侍れば、人の子の手本ともなれかし、且つは國守の御仁

の遍きを仰ぎ奉り、また得能氏仁慈の心深きを感じ、その言  
 上書じやうしよの寫しを請ひ求めて、ありしまゝを書きしるし、梓しづにち  
 りばめぬ。嗚呼、わが母にも去年おくれぬ。世上の人々、父  
 母存生の内、孝心おこたり給ふべからず。  
 (西遊記)

二一 多摩御陵參拜の記

九條武子

如月の春まだ浅い日曜の晝、私たちは浅川の御陵參拜の  
 爲に路を甲州路に取つて自動車を走らせた。曇つた空は  
 薄日もささず、立迷ふ雲の往き來も、今日の心持に似て、何か  
 知らず心寂しい。甲州街道は良い路であつた。自動車は  
 靜かに走つて行く。過ぎて行く沿道の村々は、春の訪れも

九條武子

歌人

京都の人

男爵九條良致の夫人

昭和三年(五)歿

年四十二

如月

昭和二年

浅川

浅川

東京府西多摩郡八王

子市の西

走一志

後れて、まだ冬籠りの寂しい色に包まれてゐた。

梅も咲かずまばら篋

くろ土に

春まだおそき

村つづきかな。

にはつ鳥胸毛ふくらせ

掘る土に

草の芽いまだ

こもりてあるらし。

青い屋根、桃色の窓、ラヂオのアンテナなども見えるペン  
 キを塗つた現代式住宅がだんぐりに少なくなつて、調布の



道 街 州 甲

ラヂオ

放送無線電話

アンテナ

ラヂオの架空線

ペンキ

ペイントの訛り

植物性乾燥性油であ

る亞麻仁油・桐油等

に各種の顔料を混和

せし塗料

調布

東京府北多摩郡調布

町の南に多摩川流る

果を過ぎたあたりは、見はるかす遠い丘に鎮守の森、桑の畑など、それらが武藏野らしい昔のまゝの畫幅を展げてゐるのも嬉しかった。關西の景色に見馴れてゐる自分には、漫漫たる丘陵と雜木林との多い眺は、いかにも關東らしく思はれて、面白く感じられた。

多摩川はまだ冬枯のまゝに、ほゞけた薄が堤に残つてゐる。浅い流の水面には灰色の雲が光なく映り、鼠色と茶褐色との野を、一線にくつきりと松林が劃してゐる。松には春もなく、冬もない、何時に變らぬ常磐の姿は、悟道の一境に達した人の心の様だとも言へる。泣いては笑ひ、求めては失ひつゝ、迷へる心は、咲いては散り、染めては落ちる木のた

多摩川  
山梨縣丹波川の下流  
東京府に入りてより  
蒲田區羽田に至りて  
海に入る  
長さ一五二軒

ぐひでもあらうか。松節の堅きを讚美する一方には、何かしら不變といふことが却て寂しいもののやうに思はれて、常に變化から變化を楽しんでゐる心持が考へられる。

路のべにふと見し事のしかすがに

心にふれて身にしむ今日は。

八王子市の郊外に近づけば、一面の桑園である。今は知らず、昔は機織り暮したであらう家々の女等の仕事か、ゆかしくもまた懐かしいものとしのばれる。

村々を通つて落着いた眼に、市の店頭は急に華やかに映る。新宿からの京王電車は、此所まで延びてゐる。此所から浅川までは乗合自動車の便もあるが、乗客は何れも御陵

八王子市

東京府西部地方の都  
邑  
東京市の西約四十軒

京王電車

東京市四谷區新宿か  
ら八王子市にいたる  
電車  
御陵前驛へは北野驛  
から分岐してゐる

參拜の人たちであらう。何々團體、何々青年團の紋服の者  
制服の者など、お参りの人足は、此所から淺川まで間斷なく

つゞいてゐた。

八瀬の童子が仕へまつりし葱  
華輦渡御の御有様をしのびつゝ、  
やがて東淺川橋を渡る。

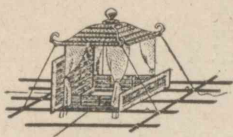
淺川の河原の石も

ひとつひとつ

泣きぬれにけん

みはふりの夜を、

御門を通つて參道十數町の間、鯨幕引渡され、幾百基の高



八瀬の童子  
京都市の北方八瀬村  
出身の奉仕者  
葱華輦

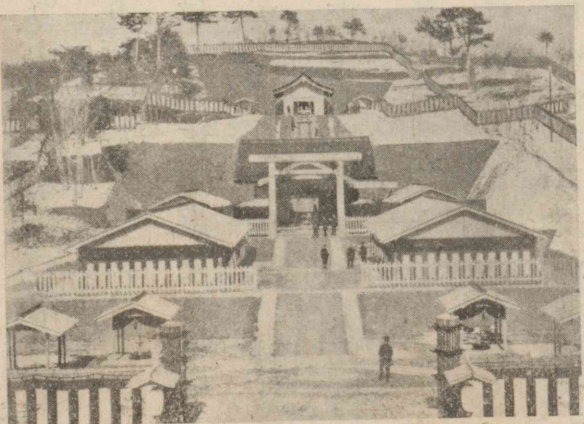


葱華輦渡御

宮様

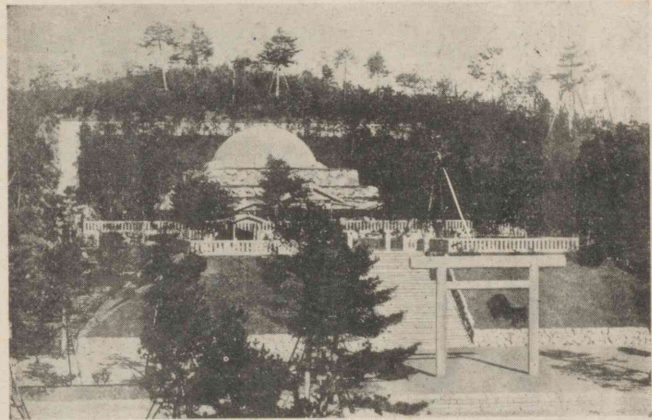
秩父宮殿下  
御名雅仁(ヤスヒト)  
明治三十五年(五五)  
六月二十五日御誕生

張提灯もそのまゝに先つ夜のまゝなるも悲しみ新に、いよ  
よ胸閉ぢらるゝを覺える。お若  
き御名代の宮様が、かの寒夜を父  
帝の御喪主とたゞせられ、御悲し  
みの足どりも重う進ませられた  
であらう、淨き玉砂利の路は、今一  
日幾萬を數へる國民の參拜の群  
に踏み固められてゐる。第二の  
御門の左側にある參集所にて姓  
名を通じ、其所で手を清め、口を嗽ぎ、守部の人に導かれて御  
境内に參進する。御幕の内には、近衛の兵士が御靈をお守



當時の多摩御陵

先帝  
第百二十三代大正天皇



りまゐらせてゐた。霜さゆる曉かけて焚かれた庭燎（はな）のあ  
 とを見るにつけても、紅に燃える  
 大かゞり火、遠く奉悼の弔音をこ  
 多めて鳴り渡る百八聲の梵鐘の響、  
 その夜はいかに森嚴な御事であ  
 つたらうとしのばれる。御鳥居  
 近く數歩の前に參進して、此所に  
 誠を籠めて拜し奉る。先帝の御  
 靈永へに神鎮まり給ふ大前とて、  
 忝さにおのづから頭が垂れて、ひ  
 たすらに心からの合掌を捧げるのみであつた。

みささぎのほとりま近うおほけなく

をろがみまつる今日のかしこさ。

大前の清らかな砂を踏む足音も、神域にはぐかりある心  
 地してもとの參集所まで退いた。しかし、このまゝお暇申  
 し上げる事は、何となく御名殘が惜しまれて、今度は一般參  
 拜の人たちの列に入つて拜觀した。

大前の左側に葱華輦が安置されてあつた。

にび色のたれ帛おもしみすぬちの

大みひつぎをしぬびまつるも。

八瀬のわらべ幸こそありけれいやはての

みともつかへぬ民多きなかに。



さきに拜した御鳥居祭場殿を尙ほもしみくと拜し奉れば、其所には日像、燾旛、月像、燾旛を兩側に、鉦鼓、御弓、大眞榊も奉られてあつた。祭官は、此所に日供をお供へ申し上げるのであらう。

日のみ旛はた月のみ旛の並びたり

祭場殿のその夜をしおもふ。

靈柩を上げまゐらせたインクラインも、今は奇麗に芝生を以て蔽はれてゐた。その高い上に、玄居は半ば半月形に仰がれる。御須屋の扉は堅く鎖されて、御靈は永劫とこに長房山丘に安らけく鎮まりますのであつた。

短き私たちの生涯に於て、大君の永劫の大御幸を二度ま

鉦鼓



インクライン  
傾斜面にレールを敷き電力によつて船舶貨物等を臺榊に載せて昇降する装置

長房山  
南多摩郡浅川村

でも送り奉ることは、何にたとへ様もない悲しき極みである。泣いてもく泣ききれぬ奉悼のうちに、しみくと偲び奉るは、量りなき御恩徳である。私たちは御恩徳に對し奉り、唯報謝の誠を捧げるのみである。詔の示し給ふまゝに、新天皇の良き民として仕へ奉り、かゝやく日本の建設に努力するより外に、私たちの進むべき途はない。御陵の御前に仰ぎては伏し、伏しては仰ぎ、我も人も暫しは跪ぎきたずんでゐた。

くぬぎの雜木林は黙して立ち、夕近き浅川の里は、靜かに喪に籠つてゐる様であつた。冬枯の武藏野もやがて訪れる春の光に蘇り、小鳥らもまた御陵のほとりに可憐な挽歌

武藏野  
昔の武藏野の國（今の東京府と埼玉縣）一帯の原野

を捧げまゐらせる事であらう。

(無憂華)

柴田鳩翁

江戸時代の心學者

京都の人

天保十年(四九)歿

年五十七

恥—耻

二二 身の恥になる事知らぬ女房

柴田鳩翁

さる所の下女が、香の物鉢を取りおとして割りましたれば、内儀が大聲をあげて、

「おりん、何を割つたのぢや。」

「はい、香の物鉢を取りおとしまして、大きに不調法でござりました。」

「なんぢや、鉢をわつた。其の鉢がおまへの二年や三年の給銀で買へるものか。先度も大事の茶碗を割つて、又け

ふも鉢を割つてぢや。さう片端から割つて貫うては、こちらの身代は半季もつゝかぬ。」

とわめくを聞いて、御亭主が、

「これく、どうしたものぢや。そなたは、とかく仰山なもの言ひやうをする。世間體もわるい、ちとたしなましやれ。すべて女と言ふものは、何言もやさかたに、小さう取りなして言ふものぢや。おれが、此の間江戸から歸りがけに原の宿でとまつて朝たちしなに、草鞋をはきながら、<sup>二</sup>ても富士山は大きなものぢや。」<sup>一</sup>と言うたれば、宿屋の下女がいふには、「いえく、あのやうに大きう見えまして、半分は雪でござります。」<sup>二</sup>と言うた。兎角女子はかうやさ

原の宿  
駿河の國にある宿

しう言ひたいものぢや。そちがやうに、かりそめにも、仰  
山に物いふと、女子おんならしうな  
うて聞えがわるい。以來ち  
とたしなましやれ。」

と叱りましたれば、内儀が頼ふ  
くらしして、其のくらゐな事、わた  
しぢやとて、知つてゐます」と、競  
り合うてゐる處へ、懇意の人が  
見え、

「されば、八兵衛さん、此の間江  
戸からお歸りと承りましたが、先づ御機嫌ようておめで



原安の宿よ見たり  
富士重筆

女中

女又は婦人といふ程  
の意  
鹿島のことふれ  
昔、毎春其の年の吉  
凶について、鹿島明  
神の御託宣を諸國に  
觸れまはりし事、又  
それを觸れまはる人

たうござります。定めて長の道中、お疲れもあらうと存  
じましたに、お見うけ申せば、能う肥えてお歸りなされた。  
と挨拶するのを、内儀が横合から出しやばつて、「いえ、あ  
の様に、よう肥えて見えますのは、半分は垢でござります。」と  
言はれた。

なんと出來の悪い内儀ではござりませぬか。得て悪う  
すると、こんな女中があるものぢや。我が身の恥になる事  
も知らずに、亭主のわる口を隣近所へ言ひまはる、鹿島のこ  
とふれ、山の神の御託宣には、こまり入つたものでござりま  
す。おたがひに、腹の中をさがして見て、亭主のわる口をふ  
れあるきはせぬか。かしこがつて出しやばりはせぬか。

頼べたをふくらして居はせぬかと吟味するが肝要でございます。  
(鳩翁道話續々編)

貝原益軒

江戸時代の儒者  
名は篤信  
又損軒と號す  
筑前の人  
正徳四年(三七四)歿  
年八十五

二三 知行並進

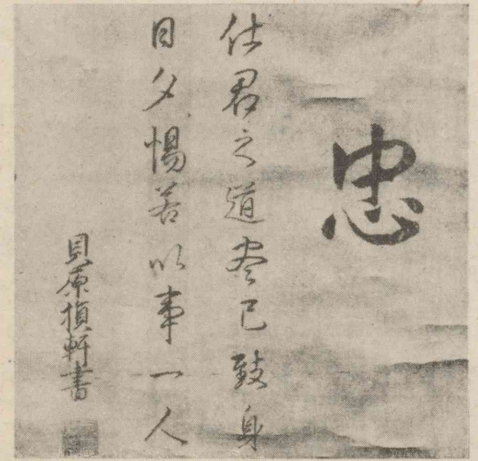
貝原益軒

學問の法は知行の二を要とす。此の二をつとむるを致知力行とす。致知とは、知ることをきはむるなり。力行とは、行ふことを力むるなり。

道を知ること明かならざれば行はれず。たとへば目なきものの足すくやかなれど、行くべき道知らずで行き難きが如し。行ふことするどならざれば、知りても用なし。たとへば目明かなりと雖も、足立たざれば行くことかなはざ

筆蹟

君に仕ふるの道は、己を盡して身を致すなり。日夕惕若として以て一人に事へん。貝原損軒書



貝原益軒筆蹟

るが如し。知と行とは、目に見て足にて行くが如し。目くられければ行くべき道見えず。足立たざれば行くこと叶はず。目、足ともに備らざれば道を行きがたきがごとし。知を先きとし、行を後とす。萬のこと、先づ知らざれば用なし。故に輕重をいへば、行ふを重しとす。知ると行ふとの二は、一をかくべからざること、鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のごとし。學問は知と行と並び進むをよしとす。並び進むとは、知

れることは即ち必ず行ふを言ふ。少しの前後はあれどさ  
きだちおくれず、一度につれだちてゆくを、ならび進むとい  
ふ。知れるばかりにて行はざるは、並び進むに非ず。(益軒全集)

古泉千樫

歌人  
名は幾太郎  
千葉縣安房の人  
昭和二年(一九二七)歿  
年 四十二

二四 青鬼灯

兒を伴ひて

古泉千樫

さらさらと水の音する山あひに道は入りつつ  
夕寒きかも。

山の上に月はいでたり汝が知れるかのよき歌  
をうたひつつ行かむ。

九品佛

岡麓

岡麓

歌人  
本名は三郎  
東京の人  
明治十年(一九一七)生

若山喜志子

歌人  
故若山牧水夫人  
長野縣の人  
明治二十二年(一九一七)生

董咲くみ寺の庭の芝原に春の夕日のかげ遠の  
きぬ。  
寺庭の古木の銀杏芽をふきて夕あつまる鳥さ  
わがしき。

若山喜志子

霧島のこごしきやまの日あたりにいでてつみ  
たるりんだうの花。

蟹

人間の五つ六つなるうなゐ子の遊べるさまぞ  
この幼な蟹。  
この子蟹いまだ缺もありなしのいたいけなれ  
ば掌にもものせまし。

今井邦子

歌人

本名くにえ  
長野縣の人  
明治二十三年(三五〇)  
生

今井邦子

ひむがしにあらはれいでし望の月、ゆふ空なが  
ら明らけく見ゆ。  
めづらしみ山の花取りに子が行きし山をかく  
して夕立きたる。  
朝朝に水とりかへてをしみ見る山桔梗は吾子  
が折り來し。

水町京子

歌人

本名宮坂三千子  
香川縣の人  
明治廿四年(三五七)生

水町京子

わが庭の薄はいまだたけひくし朝朝にむすぶ  
露のすがしさ。  
あかときの高原の草わけて來る馬のたてがみ

伊藤左千夫

歌人

本名幸次郎  
千葉縣の人  
大正二年(三五七)歿  
年五十

伊藤左千夫

露にぬれたり。  
まよなかと夜はふけゆきてあきらけき月夜の  
庭に松の葉おつる。  
暫くを三間うち抜きて夜ごと夜ごと兒等が遊  
ぶに家湧きかへる。  
おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと  
柿の落葉深く。  
廚なるながしのもとに二つ居て蛙鳴く夜を蚊  
帳釣りにけり。

長塚節

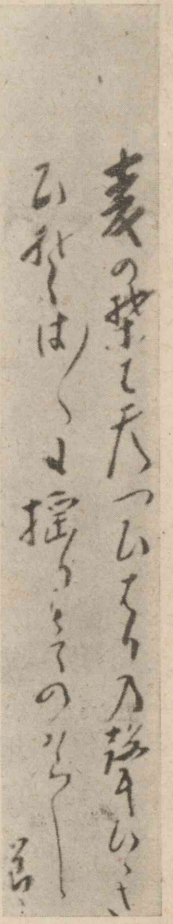
文學者 歌人

茨城縣の人  
大正四年(三五七)歿  
年三十九

長塚節

筆蹟

麥の葉は天つひばりの聲ひゞきひとはひとはに揺りてのぶらし



蹟筆節塚長

水打てば青鬼灯の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり。

北原白秋

北原白秋

詩人

歌人

名は隆吉

福岡縣の人

明治十八年(一四五)生

山吹の一重が花の咲きしだる春山岸のにはとりのころゑ。

深山路は驚きやすし家鳥の白き鷄に我が遇ひにけり。

中村憲吉

中村憲吉

歌人

廣島縣の人

明治二十五年(一五五)生

杉浦翠子

歌人

埼玉縣の人

明治二十四年(一五五)生

杉浦翠子

洋館の椿をゆする疾風ピアノ鳴りつつ弾音はやし  
いそがしく蛙は庭に鳴き止みぬすなはち雨の家めぐる音。

今朝來たる葉書をわれはひもすがら懷にせし帯とけば落つ。  
つきくにまき葉ほぐれていろかざす芭蕉のみどりつねあたらしき。  
脚のさきに小石蹴りつつ歩きたりこのゑましさを胸に守らむ。

四賀光子

歌人

本名太田光子  
太田水穂の夫人  
長野縣の人  
明治十八年(三四五)生

四賀光子

はねつるべはねて水汲む朝庭に柿の青實の落  
ちぬ日ぞなき。

砌なる松葉牡丹に日の照ればわが手習の水乾  
くなり。

二五 母心を讃ふ

川久保かね代

悲母の恩愛

「もろくの世間において、何者か最も富み、何者か最も貧  
しき。悲母堂に在す、これを名づけて富めるとなし、悲母

川久保かね代  
教育家  
和歌山縣の人  
明治二十七年(四五五)  
生

在さざる、これを名づけて貧しとなす。悲母、在す時を名  
づけて日中となし、悲母死する時を名づけて日没となす。  
悲母、在す時を名づけて月明となし、悲母亡き時を名づけ  
て闇夜となす。このゆゑに、汝等勤加修習して父母に孝  
養せよ。かくの如き人は佛に供養する福と等しうして  
異なることなき福を得べし。」

と心地觀經に説かれてゐます。

佛敎では母を悲母といひ、母の恩を「悲」といふ文字で現は  
してゐます。此の悲の字には、千萬無量の意味が籠められ  
てゐます。まことに悲母の悲愛、悲恩は、地上に於ける最も  
聖く美しく、また哀しきものでありませう。

心地觀經

大乘本生心地觀經の  
略  
八卷



熱田  
名古屋市南區の一部  
堀尾吉晴

戦國時代の武將  
秀吉歿後家康により  
出雲・隠岐廿四萬石  
に封ぜらる

尾張の人  
慶長十七年(三五)没  
六十九

てんしやう十八ね  
ん  
天正十八年(三五〇)

そくしんじやうぶ  
つ  
即身成佛

尾張の熱田に裁斷橋と言ふのがありました。此の橋は秀吉の臣、堀尾吉晴の老夫人が、我が子金助の戦死後、三十三年目の年忌の記念に、私費を投じて架けたものであります。其の橋の擬寶珠の銘に、かう誌されてゐます。

「てんしやう十八ねん二月十八日に、をだはらへの御ぢん、ほりをきん助と申、十八になりける子をたゝせてより、又ふためとも見ざるかなしさのあまりに、いま、このはしをかける事は、の身には、らくるゐともなり、そくしんじやうぶつし給へ。」  
いつがんせいしゆんと、後のよの、又のちまで、此かきつけを見る人は、念佛申給へや、卅三年のくやう也。」

大正十五年  
紀元二五七六年  
精進川  
熱田傳馬町の東に於  
て熱田港に入る

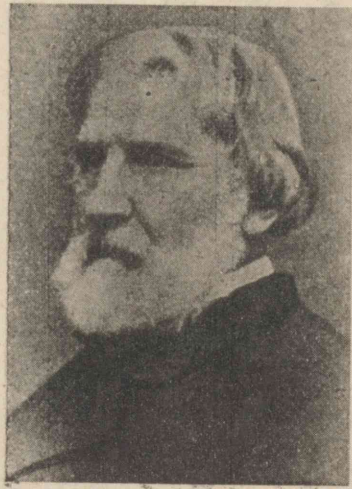
「いつがんせいしゆん」は、金助の戒名「逸巖清俊」であります。まことに涙なくしては讀めぬ名文です。わが子に死別して三十三年、悲母の悲しみは消えないのみか、その悲哀は聖化して善事美擧となり、後の世のまた後の世の人の、念佛申すよすがとはなります。まことに哀しく美しき悲母の恩愛。

大正十五年、裁斷橋の架せられし精進川の埋立工事のため、橋も取拂はれようとなりましたが、その尊き由緒を重んじ、



珠寶擬の橋こばんお

原の場所に擬寶珠ある欄干の四柱を保存し、永久に慈母の切なる至情を傳へて居ります。見る人の心に惻々としみ



フーネゲルツ

るものがあります。附近の人は今もなほ、此の橋をおんばこ橋と呼んでゐます。

母性の愛の強さは人間に限らず、なべての生き物に遍満してゐます。「焼野のきゞす夜の鶴」と、古くから例へられてゐるやうに、鳥類にすらあります。ツルゲネーフは、その散文詩の中に、子雀を獵犬から救はんとする親雀の母性愛の強さを讚へて、

ツルゲネーフ  
(一八七—一八八)  
ロシアの小説家

「私はこの小さな殊勝な生物に對して、敬虔の念に打たれたのである。私は思つた、母性愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。人生は唯此の愛によりてのみ安全に進歩するものである。」と書いてゐます。

鳥類ばかりではありません。牛や馬や猫や犬のわが仔を愛撫することは人の皆知るところ、猿や鯨なども、子どもが捕はれる時、死の恐怖を超えて、わが仔と運命を共にすると言ふ幾多の哀話を傳へてゐます。しかし、畜類の哀しさ、その愛は本能の境を一步も出ようとはしません。その仔が獨立すると、母仔の關係は全く忘られて終ひます。人間

の母の尊さ、本能の愛に根ざしたものは言へ、聖なる境にまで進み高められて、わが子を守り育て生かさでは已みません。

昨年の秋のことでした。

玉蓮院へ女子共生青年のためお話に参りましたところ、五十名ばかりの花耻かしい少女たちが、二つに分れて圓坐して百萬遍の大念珠を繰つてみました。



百萬遍の念珠

稱名の聲と共に、數珠は少女達の織手を通つてくるくと繰られてゆきます。親珠が巡つて参りますと、恭しく頂禮ちやうらい

玉蓮院  
東京市淺草區淺草にある淨土宗の寺院

古屋師  
名は誦道

致します。自分も中に割り込んで共に繰つてみました。手の上を通つてゆく澤山の珠には、何か文字が刻まれてゐます。「どうしたいはれの珠なのか」とふと考へましたが、若き人々の美しい念佛の聲に何事も忘れて、ひたすら稱名を歡んでゐましたが、やがて中憩となつて、住職古屋師はおもむろに數珠のいはれを語られました。

まことに記すだに恐れ多いことではありますが、大正の御帝が、御幼少に渡らせられた御頃、御身弱くいらせられたので、御生母様がしばしばおしのびで御參詣、この數珠を御繰り遊ばされ、み健かにならせ給ふやうに御祈願をこめられしとか。親珠にはその御名が刻まれ、他の珠には尊き方々

大正の御帝  
御名嘉仁(ヨシヒト)  
第百二十三代  
大正十五年(英六)十二月二十五日崩御  
寶算四十八  
御生母様  
柳原愛子の方

や知名の方の名が彫られて居りました。  
げにかしこき御母の恩愛、かくて明らかく治まりし大御代を承け嗣ぎ、大正の聖帝として、み國を彌榮に正しく統べ給ひ、道の國日本の御威光を世界に輝かし給ふこととなりました。げに尊き御母の力。

(新教育による母の書)

村井弦齋

小説家

本草家

名は寛

昭和二年(三〇〇)歿  
年六十五

二六 懐かしの故郷

村井弦齋

雪ならば幾たび袖を拂はまし

花の吹雪の滋賀のやま越。

それは彌生の春の頃、櫻狩りして行く道の眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々

たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山を打越ゆ

れば、満目蕭條たる湖上の風景、辛

崎の松は暮靄朦朧の間に隠れて、

堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴

き渡る。見渡せば、白雪皚々たる

比良の雪、今よりこの山路に掛ら

ば、山中にて日は暮れん。疲れし

足の進み難きに、坂本の邊にて宿

を求めんか」と、獨り旅の少年は前

路を睨んで、暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、彼

滋賀の山

滋賀縣近江國滋賀郡

滋賀村の山

大津市附近

條一条

辛崎・堅田・比良

何れも近江八景の中

の地名

坂本

いま滋賀郡比叡山の

東麓にある町

我が故郷

滋賀縣近江國高島郡

小川村



比良の暮雪

の山を越ゆれば、我が故郷。今一息にて母君の許に、着くな  
るに、何とて空しくこゝに留らん。夜にてもあれ、朝にても  
あれ、家に歸らば疲れも厭はじ。いでく、心を取直し、今宵  
の中にこの小山、越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗  
き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山  
路を、杖にすがりてたゞ一人、たどりく、て行く道の、岩につ  
まづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を  
紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。  
やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれ  
ど、彌増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂

藤太郎  
中江藤樹の幼名  
藤樹名は愚  
徳川時代の儒者  
慶安元年(三〇〇)歿  
年四十一

寞として、耳に答ふるものとは、閉ぢし氷の下潜る、細谷川  
の水の音、松の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して枝折れ、  
雪の落つる響など、かすかにもの凄く聞えて、怖しとも悲  
しとも譬へんやうなし。かゝる難處と知りもせば、麓にて  
一夜を明かししものを、旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこ  
の深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先きへも出で  
られず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せる者  
の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る  
雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓えを感じ  
て、寒さは一入身にしみ渡り、眠るともなく死ぬともなく、前  
後を知らずなりにけり。

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覚えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲れも打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起き出でず。「かの家は我が友の家な江りけり。この家には我に優し藤き老人ありき」と、昔の事を想ひ出でて、そとろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。



見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復

昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふ儘に根を延ばして、彼方此方に生ひ出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。「母人は未だ起き出で給はぬにやあらんと、築地の蔭より内に入りて、勝手の方を見れば、車井のきしる音さへ寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。「昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、この雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なし」と、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈け行き、後よりその袂を引き、

「母様、私が汲みませう。」  
と、涙ながらに取りすがる。

事の不意なるに、母は驚きて振返り、

「誰か。藤太郎、どうしてこゝへ。」

藤太郎は細き聲、

「はい、母様の御手助けを致しに参りました。まづ内にお入り遊ばせ。おつむりに雪が掛ります。」

と孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。

「叔父様とでも一緒か。」

「いえ、一人で御座います。」

叔父様  
祖父吉長をさす  
大洲侯に仕ふ  
藤太郎は父の若くして歿せし後祖父に養はる  
九歳の時伴はれて愛媛縣伊豫國大洲に赴く

母は聲を勵まし、

「叔父様が、一人和郎をお出しなされたか。」

「いえ、叔父様には知らせずに参りました。」

母は眉を揚げ、

「怪しからぬ、何故そんな事を。さあ、お話しなさい、和郎が歸つたわけを。いえ、こゝで聞きませう。聞かないうちには、めつたに家へは入れません。」

颯と吹來る朝風に、地上の雪はくるくると捲き揚げられて、横に二人の顔を撲つ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根に、そゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん。わざと言

を勵まして、

「和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に頼む時、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人にならないうちは、決して中途で歸るな。」と、あれほど堅く言ひ聞かせた事を忘れましたか。この母が難儀を忍ぶのも、たゞ和郎を立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手助けをしてくれたとて、何のそれがうれしからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び逢ひません。その足で大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力抜けて雪

大洲  
いま愛媛縣喜多郡大洲町  
當時加藤貞泰六萬石の城下

満  
百里  
約四百軒のこと

の上に跪きぬ。母はその失望せる様子を見て、痛はしさに満ち「かくまで我が身を思つて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も、辛き事も多かりしならん。せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲れを休めさせんか。」と、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまやかに弱き心を見せなば、修業の邪魔「獅子は子を千仞の谷に落す。」と聞くものを、

「和郎は、母の言ふ事が解りませんか。」

と強くは叱れど、聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、



「はい、解りました。」  
「それなら、今から歸りますか。」

藤太郎は悲しき聲、

「はい、歸ります。」

と素直に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸の絞  
らるゝ思ひ。遂に堪へかねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を  
呑む。藤太郎は屹として立上れり。

「母様、この薬は輝あかりの妙薬で、世にも得難き品。これ差上げ  
たいと、わざ／＼持つて參りました物。これだけはお取  
りなされて下され。」

と、新谷にやにて得し薬を差出す。母は快く、

薬一葉

新谷

いま愛媛縣喜多郡新  
谷村  
當時加藤氏の領地  
大洲町の東北約七軒  
程

「おお、和郎の志、これだけは受けませう。」

と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向  
く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。

母は恥かしと、じつと耐こらふる心の苦しさ。子は堪へざり  
けん、薬を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろ／＼と  
落つる涙。

雪はなほ霏々たり。母が汲み置きし水を見れば、いつの  
間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心  
を勵まして、泣く／＼我が家を立出でたり。見送る母、見返  
る子、満天の風雪、路悠々。

(近江聖人)

島崎藤村

詩人

文學者

名は春樹

長野縣の人

明治五年(三五)生

二七 草の言葉

島崎藤村

芭蕉。しばらくこの庭を掃きに来る人の足音を聞か  
な  
す。



芭蕉

蕙。この主人も、よく  
箒を手にして落葉を掃き  
に来たものだ。その度に  
土の色が生々として、強い  
香を放つたものだ。今は  
庭掃除もないと見える。

おそろしい霜溶けだ。

芭蕉。さう言へば、私の葉の乾したのが庭前の軒下に釣

るしてある筈だ。

蕙。あれは軒下ではなくて、縁側の壁の上に釣るしてあ  
る。あんなものが掛つてゐるところも冬の日らしい。

芭蕉。私が人と親しくなつたのも、あの葉を贈りはじめ  
てからだ。次第に私は人と交はるやうになつた。私は自  
分の贈つた葉が、しばらく夏の籐椅子の上に置かれるのを  
見た。そこへ来て暑さを忘れ顔によく腰かける主人を見  
た。人間はいろくなことを思ひつくもので、私の葉を沸  
き立つた風呂桶の湯のなかに浸して置いて、それで入浴す  
ることをやりはじめた。

蕙。「菖蒲の湯」といふことは、私も聞いたことがある。

芭蕉。それをこの主人は私に應用したのだ。最初は、私が贈つた青い葉をそのまま入れて見たが、二度目からは乾葉にして試みたといふ。どうだらう、その湯はやほらかく、かすかなこゝろよい香氣もあつて、人のからだを温める。蕙。お前の幹から切りとられた大きな葉が、あの縁側にひろげられたところは、私もよく見かけたことがある。あれは、見てもすすしさうだつた。清い雫があつた葉の切り口から滴り落ちた。

芭蕉。私の生活がこの土の中ばかりでなく、人の住む屋根の下でも營まれるやうになつたのは、あれからだ。おそらく、私は今までに三四十枚の葉を、この主人に贈つたら

營—營

う。しかし私も、自分の葉がこんな風に役立たうとは思ひがけなかつた。私は、この庭つゞきにあるさゝやかな風呂場の屋根から立ち登る煙を想像する。楽しい芭蕉風呂に身を浸しながら、冬籠りらしい時を送つてゐる人々のことを想像する。

芭蕉。私の笠をなぶりに来るものがある。私の着た蓑をくはへて、藁屑などを引張り出すものがある。

蕙。雀だ。

芭蕉。何が来て、悪戯をするのかと思つた。雀か、雀もどうして生きて行くだらう。

戲—戲

蕙 さつきから、私はあの雀のすることを見てゐた。  
 芭蕉。お前は饑ゑた小鳥を見物してゐられるのか。  
 蕙。ところがさうでない。この主人があゝの石の上へ

米をまいて呉れたのに、雀がそれを知らずにゐるからだ。私はさう思つた。「眼さといやうでも、やつぱり雀だ、あの白いものが見えないのか」と。雀は何も知らず顔に、毛の生えた棕櫚の樹にとまつたり、馬酔木の枝の間をくゞつたりして、しきりに蟲や木の實を探し歩いてゐた。一羽、お前の



馬 酔 木

笠までは來たが、またそれも飛去つて行つてしまつた。

芭蕉。眼のないところには、糧もないものか。



雀

蕙。そのうちに見つけた。何程の用心深さで、あの雀は白い米粒の方へ近づいて行つたらう。あれは、一息に石の上へ舞ひ降りないやうだ。遠廻しに、あの楓の枯枝へ來た。そして鳶色の頭をかしげたり、あちこちと見廻したりして、しきりにあたりの様子を窺つたものだ。楓から山茶花、山茶花から薔薇と、順に低い枝へ來て、冬でも廣い葉を



山茶花



垂れた葉蘭のかげをつたひながら、あの石の方へ近づいて行つた。それから糧にありついた。

芭蕉。お前の話で、悪戯ものの正體が分つた。雀と、子供には、どんなことをされても可愛い。私はまた、何が来て、こんな自分の袖を引くのかと思つた。この寒空に、雀も蓑や笠を欲しいと見える。

蕙。毎年きまつてやつて来る雪が、もうこの庭へも来るやうになつた。

芭蕉。さう言へば、私の笠も重い。

蕙。これは、年の暮にちらつくこまかい雪でもなくて、春先きにやつて来る綿のやうな雪だ。

芭蕉。私は、それをこの笠の重さで知る。して見ると、私達は、今、寒さの峠を越えつゝあるのだらうか。何時の間にか、年も改まつたとは思へないやうな氣もする。

蕙。お前もよくそこに立ちつくした。御覽、あの高い棕櫚の葉の振ふ雪は、おそろしい勢で私の上へ落ちて来る。その度に、私は眼が眩むやうな氣がする。しかし、私は雪に埋れるよりも、夜になつて襲つて来るこの後の寒さを恐れる。

芭蕉。雪もいくらか溶けたらうか。

蕙。ところまだらに残つてゐる。お前の笠の上にも、私の葉の上にも。

観音草



芭蕉。私はあの小さな蘭や、細腰で弱々しい観音草の消息をも知りたい。

蕙。あるものはまだ残つた雪の中に隠れ、あるものは僅かに顔を出してゐる。

芭蕉。さう言へば、お前は曾て竹の折れる音を聞いたことがあるか。どんなすぐれた音楽者でも、あの瞬間の鋭さを寫し出すことは出来まいと思ふよ。春の雪には、あの竹を折るほどの力すらもある。

蕙。しかし私達を強くし、丈夫にし、勇健な蘇生の力を與へるのもあの雪だ。

芭蕉。さうだ、この雪を通り越すことなしに、私達は新し

樂樂

い春にめぐり逢ふことも出来ないのだ。いつか、私は笠を脱ぎ、蓑を脱ぎ、堅く巻きつけられた太繩をも捨てて、もう一度廣々とした青空を仰ぎ見るやうな日を迎へるだらう。もしその日が來たら、私の新しい巻葉が青い喇叭を見るやうになつて、日にく延びて、もう一度、お前のために楽しい静かな影をつくるだらう。

蕙。今からさういふ日が待たれる。

芭蕉。何と言つてもまだ寒い。まだく私達は冬籠りの状態から抜けきることが出来ない。また雪でもちらついてゐるのだらうか。

蕙。雪でなくて、雨だ。あの冬の名残を思はせるやうな、

音のしない雨が、残つた雪の上に来てゐる。

(島崎藤村文學讀本)

# 昭代女子國文 卷二終

新版昭代女子國文 卷二

昭和十二年八月十九日印  
昭和十二年八月二十二日發行  
昭和十三年二月十二日修正再版印刷  
昭和十三年二月十五日修正再版發行

定價 各金六十錢

文部省檢定

高等女子學校國語教科用



編者

東京市杉並區西田町一丁目七百七十三番地  
金子彦二郎

發行者

東京市神田區神保町一丁目五番地  
上原才一郎

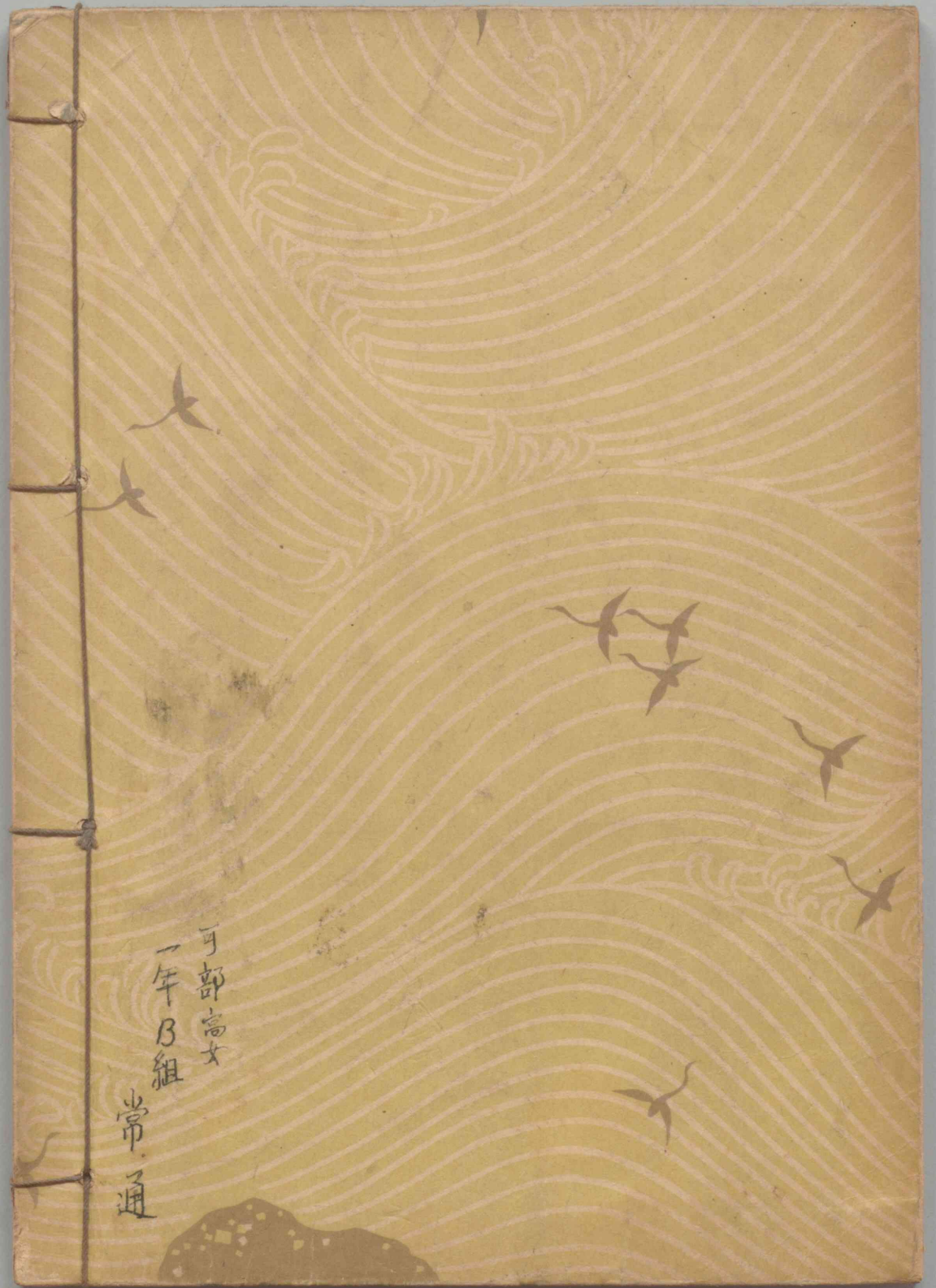
發行所

東京市神田區神保町一丁目五番地  
光風館書店

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
大日本印刷株式會社  
根本力三

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に  
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候



可部高女  
一年B組  
常通